

ことのあらまし

減多少増

(20170722-20200928)

これから書かれるあれこれは、誰にとっても興味深い話であるとは限らない。むしろ誰一人にも興味を抱かれない話題になるかもしれない。おそらく、幾人かは興味を持ちながらもそのような誰かは結局は読み始めることさえないということになるのかもしれないし、あるいは興味の有無とは関係なく、たとえば時間がありあまっていたが故に読み始めはしたものの読み終えるには至らなかったということもあるだろう。まったく興味はないのだが、何度も読み始めそしてたんねんに読み続けそして運良く読み終え、さらに幾度も繰り返し読んだあげくあまつさえ正誤表を作ってしまったというような誰かがどこかにいることになることはないだろう。

そのように興味を持たれない文章に意味があるのだろうかとか誰かが考えるかもしれない。さらにまた、意味があることに意味があるのだろうかとかさえ、また別の誰かが考えることになるのかもしれない。それが同じ誰かである可能性もないわけではない。そもそもそのような疑問を誰が考えるというのだろうか。意味があれば書かなくてはならないという決まりなどないように、意味がなくても書かれる文章は確かに存在する。ここにこれから書かれることになるあれこれは、偶然に何の必然性もなくたまたまここにこのように書かれていたというだけのことなのかもしれない。それもまた大いにありうるだろう。何故そのようなものを、つまり誰一人興味を持たないようなあれこれを書くのかという非難あるいは苦情のようなものが生まれることもあるかもしれない。そんなことはないだろう。よく考えればそのような心配の必要がないことは明らかである。そのような心配とは、非難や苦情が生まれるのではないかという心配のことだが、書かれた文章はそこに書かれているだけであり、たまたま書かれていた文章が意に染まないことを理由に非難する誰かは、結局その文章を読んでいないのである。なぜならば誰も自分の気に入らない文章を読むことはできないからである。誰に苦情を伝えるというのだろうか。誰も興味を持たず誰も読まないような文章が、いったい誰に苦痛を与えられるのか。そのような事情も分からずにどうやって苦情を伝えることができるだろうか。伝えられないとすれば、苦情はそれを考えた誰かの中にだけ存在し、失われていく。そのような苦情が生まれたのかどうかは誰にも分からない。これらの事情をすべて考慮すれば、意味があろうとなかろうと、だからといってこれらのあれこれを書かないという理由にはならないのである。

同じように誰も興味を持たず誰も読まない文章が果たして存在していると考えられるものなのかどうかについては、いずれ誰かの話題になるかもしれない。誰も興味を持たず誰も読まない文章を想像することはできるが、その具体的な文章を思い出したり、書き表したりすることができないからである。それは話題になりやすい。あるいはそれと同じ程度には話題にされることもなく忘れられやすい。それというのは話題にされやすい程度のことである。勿論、話題にされないあれこれが忘れられることはきわめて困難だろうが、決してないとは断言できまい。

それは手紙ではないかと思った。誰が思ったのかははっきりとしない。書いた誰かが思ったのか、読み上げた誰かが思ったのか、そのような様子をながめていた誰かが思ったのか、あるいは何も関係のない誰かが不意に脈絡も理由もなくそう思ったのか、それははっきりとしない。とはいえ、手紙であれば受け取った誰かにとっては興味深いだろう。また、その手紙を運ぶことをなりわいとするような誰かにはすこしも興味が湧かないだろう。というよりも、その場合、運んでいる手紙の内容について興味を持つことは禁じられているのかもしれない。だとすれば、これから書かれるあれこれは手紙であるのに違いない。誰が書いた手紙なのかはまだ分からない。誰に宛てた手紙なのかはまだ分からない。手紙を運ぶことになる誰かに支払われる代金が幾らになるのかはまだ分からない。これこそ、その手紙がこれから書かれるあれこれであることの証拠になるはずだ。それに、そのような手紙であれば、どれだけ繰り返し読まれたとしても、正誤表を書くものなどいはいない。手紙には正も誤もないからである。

これまでも再三ほのめかしてきたように、今、これを書いているのが私であるとは限らない。それは誰もがすでに知っていることだ。むしろ、いくらかでも論理性を失わずにいられたならば、誰も私が書いているなどと考えるはいないだろう。これまでもこれからも誰も考えはしなかったししないだろう。誰が書いているかなど気にする誰かなどいないということだ。万が一誰が書いているのかが話題になったとしても、そもそも私が書いているなどと何故考えることができるだろうか。いったい誰がどのような経緯で、私が書いている可能性があるなどと思いつくだろうか。何かを書きながら同時に別の何かを書くということは誰にもできはしないだろう。たとえ主語が二つあったとしてもそんなことはありえない。もしも私が書いているのであれば、結局はそういう話になるのである。誰かが書いている文をその傍でぼんやりと眺めている誰かこそが私であるような気もする。時には読み上げもするが、書いている者の邪魔にならないように大きな声は出さないだろう。声などまったく発せずにとだ読んでいただけだとは考えられないだろうか。それはいかにもありそうな話である。それはいかにもありそうな話ではないだろうか。とはいえ時々、書いている者に間違いであるとか意見の相違について語り掛けたいと思うかもしれないと思うかもしれないが、私がそう思うことはないだろう。何故なら、書いている者は間違えないし、私には書かれている事柄について特別な意見がないからである。

冒頭でこれから書かれるあれこれと書いて以来ずいぶん多くの文が書かれた。だとすれば、ここはもうとっくに冒頭におけるこれから書かれるあれこれになっているはずだ。にもかかわらず、ここはそのこれからではなく、つまり冒頭の文からこの文字まで何一つ変わっていないなどということがあるだろうか。そうでないことがあるとは思えないのである。そうであるような気がしてならないのである。もしそうならば、冒頭からここまでに書かれた文章には、まさしく意味などなく、それゆえこのあたりにあるこれらはこれからなどではなかったということになる。その意味とはどういう意味なのかは分からない。今は分からないけれどいずれまた誰かが話題にするだろう。だとすれば、これまで書かれて来たことがらが手紙なのかどうか、そろそろ吟味してもよい頃かもしれない。これまで書かれて来たあれこれが、冒頭でこれから書かれるであろうと予言していたそのあれこれであったとするならば、冒頭からここまでに手紙らしい文などひとつもなかったように思う。冒頭でこれから書かれるあれこれと書かれていたものは実は手紙ではなかったのではないだろうか。早急に結論を出すべきではないだろう。冒頭におけるこれからが冒頭から続くここまでの文ではなかったという可能性さえまだ残されている。それだけではなく、もしも冒頭からここまでの文章が冒頭におけるこれからであったとして、そこに手紙らしい文章がひとつもなかったからといって、だからといってこれが手紙ではないといえないことは明らかだ。というのも、手紙の配達係のように読むべきではない者には意味をなさなくても、書き手と

宛先の誰かにとっては意味のあるような、いわゆる暗号が使われていたのかもしれないからだ。先にも書いたように、これを書いているのは私ではなく、これから書かれるあれこれを書くのも私ではありえない。だとすれば、私はこれらの文を読んでいるともいい難い。読んでいるのは間違いなく他の誰かであり、私はそれに関与していない。私が読んでいるのであれば、これらの文によって私の行動は影響を受けそれまでの私とは異なる生き方をするはずだが、私にはそのような変化が一向に見られないからである。ためしに、冒頭からここまでの文を何度か読み返してみるとよい。私の語ったあるいは書いたとされるような文を含めすべての文は、幾度読み返しても一文字も変わらず同じである。違う文字違う文違う文章に変わるなどないことがわかるだろう。そうであれば、私はこれらの文字文文章によって何も変化することがないのであり、何も変化することのない私が何かを読んでいるとはいいい難いのではないだろうか。私は書くこともせず読むこともせず、ただこれらの文と渾然一体となった誰かなのだろうか。そうであると考えしかあるまい。いいかえるならば、私はこれらの文そのものであると書いてもあながち間違いではないことになる。勿論、これらの文に誰かの生き方をねじまげてしまえるほどの力がないというだけのことかもしれない。そうなのかどうなのかはまだ明らかではない。

暗号で書かれた文には、己が暗号で書かれているということがわかるものだろうか。私には分からない。四文字ずつとばして読むとか、素数番目の文字だけを続けて読むとか、あるいはいったん文字を惑星軌道になぞらえたあとで再びそこからありふれた文字を読み取るであるとか、あるいは鏡に写した文と重ね合わせたときに一致しない文字が干渉することでそこに浮かび上がる文字を読むとか、そのような試みは何も明らかにしない。そのような試みからは意味の通る文は生まれぬからである。おそらく暗号ではないのだろう。文というものは、自分が何か特別な存在であると思込みたいがためだけに自分は暗号文だと信じたくなるものだ。そして多くの場合、それは暗号ではない。私は暗号ではなく、暗号でありたいとも思わない。つまり私は文ではないということなのだろう。私が文章であることはないだろう。

それとも、これから書かれるあれこれとは結局手紙ではなかったということなのだろうか。暗号にする必要もないようなありふれた文章だったのだろうか。もしもそうであるならば、手紙でないのなら冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたあれこれとはいったい何だというのだろうか。何だということなのだろうか。信じられないことではあるが、これらのあれこれらは暗号で書かれた手紙であり、手紙を書いてもおらず受け取ることもない私にはその意味が理解できていないというだけのことなのかもしれない。確かにこれはいかにもありそうな話である。

これから書かれるであろうあれこれあるいはこれまで書かれてきたあれこれを書くことになったり書いてきたりした誰かなどおそらくどこにもいないのだろう。もしも探そうとしたところでどこにも見つけ出せないだろう。あるいは自分が書きましたと誰かが訴え出たとしても、それを証明することは困難である。書いているその場に誰か目撃者がいれば証拠になるだろうか。そうとも思えない。そもそもその目撃者はいったい何を目撃したというのだろうか。誰も書いている誰かを目撃できない。書いているように見えたとしても、それがただ書いている真似をしているだけであれば、それは書いているとはいえない。もし文字を書いていたとしても、それがどこかで見た文字を思い出して書き写しているだけであれば、それは書いているとはいえない。そもそも、いったい誰が文を書くというのだろうか。誰も文など書きはしない。誰かが存在しない何かを空想しそれに文字をあてはめて書き留めるなど、そんな都合の良いことがこれほどの頻度で起きるとは思えない。つまりは誰も何も書いてはいないのである。書かれているとかこれから書かれるであろうとかいう言葉は故に何も意味しない。言葉は偶然に出現し、そして漠然と消え去ってい

く。それだけのことである。これまでもあるいはこれから書かれるであろうあれこれも、ただの現象であるということだ。これこそが誰にでも納得のできる説明である。

だとすれば、それは手紙などではなく報告書ではないかと思った。相変わらず誰が思ったのかははっきりとしない。書いた誰かが思ったのか、読み上げた誰かが思ったのか、そのような様子をながめていた誰かが思ったのか、あるいは何も関係のない誰かが何も関係のないあれこれに気づいて何の前触れもなく不意にそう思ったのか、それははっきりとしない。おそらく報告書の提出を義務付けられた誰かなのだろう。報告書の提出を求められたとき、日付と氏名と時系列に沿った記述は必須であると書かれていた。文というものはすべからず時系列に沿った文字で書かれなくてはならないのだから、時系列に沿った記述であるというだけでは何も特別なことを意味しない。しかし、日付と氏名はそうではない。報告書は特定の誰かが特定のある日に書いたものであってはならない。誰がいつ書いたとしても同じ内容でなくてはならないからである。これから書かれるあれこれはまさにそういうものではないだろうか。冒頭からこのあたりまでに書かれたあれこれはまさにそういうものではないだろうか。だとすれば、これから書かれるあれこれは報告書でなくてはならない。報告書を運ぶ誰かは報告書を書いたものか、あるいはそれを受け取ったもの以外にはありえない。だから、報告書を運ぶ無関係な誰かが誤って読んでしまうというようなことも起きるはずがない。そのため、報告書を暗号にする必要はなく、それを知っている報告書の文には暗号になるという熱意はみられないだろう。報告書というものは報告書を受け取る誰かの特定の目的のために書かれるのだから、報告書の最初から最後までどの文章も受け取ったものにとって興味を抱かずにはいられない内容になっている。何かの手違いがあった場合のみ、報告書を受け取った誰かが、報告を依頼した誰かではない場合のみ、その誰かは報告書の内容にまったく興味を持たないかもしれない。報告書の定義から、そのような手違いがあるとも思えないが、そのような事故の報告はあるかもしれない、報告書といえども興味を抱かれず、読まれなかったこともあるだろう。それが報告書なのか報告書ではないのかは報告書にはわからない。

ここまで書かれてきた文を幾度も読み返す時、初めは気づかないだろうが、いずれ、意味の分からない言葉があちらこちらに使われていることが明らかになる。意味の分からない言葉は意味が分からないので記憶には残らない。まるでそこにそんな言葉など書かれていなかったかのようだ。読み返すたびに意味のわかる言葉は消えてゆく。それらの言葉に意味がないということが次第に理解されていくということなのだろう。一面でそれはまるで、意味の分かる言葉が存在するかのよう書きようだが、そもそも、意味のわかる言葉などというものがあるわけではない。一つひとつの言葉を丹念に見直してゆけば、それはいずれ明らかになるだろう。ここに書かれてきたと書かれていた文章も、今読み返せば何一つ意味の通らない言葉である。そうであれば、これから書かれるであろうあれこれというものも、意味の通らない言葉になることは疑いようがない。冒頭からここまでの文を読んできた誰かは、読んできたと思いついていてただでまるで何一つ読んでなどいなかったかのようだ。それは正に何一つ読んでなどいなかったからである。ここには何も書かれていなかったということである。書かれていないものを読むことなどできはしない。誰かがこれらの文に興味を持てなかったのではなく、そこにはもともと文などなかったのである。文でないものを読むことはできない。正確には、そこにはない文を読むことはできない。勿論、これから書かれるあれこれなども存在せず、つまり誰も興味を持たないのではなく、書かれてもいないもの書かれることのないものに興味を抱くかどうかという問はありえないというだけのことだ。誰も読むことさえできなかったということになるだろう。そして、その結果、正誤表は決して作成されない。書かれていないものに、正も誤もないからである。

このようにすべてが明らかになった今、これがこれこそがこれらのあれこれの最後である。冒頭で書かれた、これから書かれるであろうあれこれの最後なのかもしれないし、これから書かれるであろうあれこれの前に訪れた最後なのかもしれない。勿論、もともとここには何も書かれてはいないのだから、最後も最初もありはしない。今この書かれつつある文は存在しないのであり、ありもしないこの最後に気づくことなど誰にもできはしない。それというのは、最初に気づくものがいたという架空の話である。

ことほどさように、これが終わりである。あれこれについてはもうこれが終わりである。

さて終わったというのに、すべてが終わりそれから十分に多くの改行があったのにもかかわらず、まだ誰かに読まれているかのようだ。文とは読まれていればそれと分かるものである。そしてこの文はまだ誰かに読まれていると考えられている。考えられているのが誰なのかはあいかわらず分からない。考えているのが誰なのかは分からない。分からない誰かが考えているのだろうか。それとも考えている誰かなどどこにもいないということなのかもしれない。考えている誰かはいなくても、考えられることはできる。いままさにそのようにして文は誰かに読まれていると考えられているのだろう。勿論、文というものは読まれていることがわかって、それで何かが変わるということはない。ためしに、最初からほかならないこの文までを幾度か読み返してみたところで、その度に文字も文も文章もなにひとつ、最初に読んだときとなにひとつ変わっていないだろう。なにひとつ変わっていないことが分かるだろう。文字にしる文にしる文章であっても読まれるとはそれだけのことである。読まれていると気づいていてもただそれだけのことである。読まれていない場合と何ひとつ変わりはない。終わりといってもそれだけのことなのだろう。まだ終わってはいないというだけのことなのだろう。あるいは、文字や文やあるうことか文章には自身が読まれていることなど分からないということかもしれない。

誰かの話が始まるかもしれない。誰かというのは減多少増のことだと書かれればそうなのかもしれないと思う。減多少増という名前には見覚えがある。どんな人物なのかは知らない。実は名前だけしかない誰かだと書かれれば、確かにそんな名前だと思う。いかにも作り物めいた名前だと思う。減多少増ではなく左北上底以外に語るべき人物はいないと主張されれば、特に反論はないだろう。主張する誰かがいないのなら反論する誰もいないはずだからだ。誰かの話が始まるのかもしれないが、誰も登場しない話だという場合もあるだろう。ずいぶん昔にそういう話を読んだことがある。誰も登場しない話を読んだことがある。読んだのがこの私だったのか私ではない別の誰かだったのかははっきりしない。そもそも私が何かを読んだことなどありうるのだろうか。私は読むことができるのだろうか。それよりも今この文を読んでいる誰かが読んだと書かれればそうに違いないと思うだろう。今この文章を読んでいる誰かがいるのかどうか今ここに書かれている文章にはわかるかもしれないが、私にはわからない。私は文章ではないからである。私は文ではないからである。

冒頭からここに到るまで、それがあれこれであろうとそうではなからうと、再三ほのめかしてきたように、私がすべて同じ私であるとは限らない。いやむしろ、すべてが別々の私であったと考えるほうが合理的なのだし、だとすればこれからも私は同じ私ではないのだろう。確かにほのめかしてはきたのだが、時々あたかも私というものがたった一人の私であるかのような書きようをしたこともあったかもしれない。そもそも、私という呼び方をしてきたことで私がたったひとつの私であるという誤解を与えていたのではないだろうか。勿論、私という語が出現するたびに、出現していなくても、それぞれ別々の私であったと考えるしかないのである。勿論この読みにくく分かりづらい書きようを繰り返すこれまでのあれこれやあれこれではないかもしれないこれこれを読み返せば、ほのめかしというよりもずいぶんあからさまにそう書かれていることに気づ

くだろう。勿論、このような私が書かれていてさえもたった一人の私が書かれているように読まれるのであれば、誰が書かれても同じ誰かが書かれているように読まれるだろう。かくのごとく読まれる条件に合致するこれらのあれこれは報告書に違いないと考えられていた。どの私も私ではなく、そのどの私もが書かれていないこのような文章は、誰が書かれていても同じ誰かになっていたわけではなく、誰も書かれていないからこそ同じ誰かになっていたのである。誰も書かれていない文章は文章ではないのだろうか。だとすればこれらの文章が報告書であるとは考えられにくい。つまりは報告書ではなかったということであろう。

読みにくく分かりづらい文章であるというのが賞賛であるとは限らない。勿論、複雑すぎて分からないという高評価さえ与えられるかもしれない。しかしながら、それはほんの入り口にすぎないのだし、極めて単純な基準に基づいているあるいは極めて単純な基準に基づかざるをえないと考えられる。そもそも冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれているあれこれの文章で書かれている現象はそれ自体が複雑なのであり正確に曖昧さなく記述するには読みにくかったり分かりづらかったりするという類の文章にならざるをえない。勿論、正確であるというのは不正確な言葉遣いだし、曖昧さなくというのは曖昧すぎて何を意味しているのか分からない。それに、私が書いているわけではないのだから、かくのごとくこれらの文を私が弁護する理由もあはしない。

そもそも、いったい誰が読んでいるというのだろうか。手紙であれば特定の誰かが読むのであり、報告書であれば特定の誰かが読むのだから、そのような誰かには読みふけるための十分な時間があり、多少暗号になっているために分かりにくいこともあるだろうし、状況が混乱していれば説明が複雑で分かりにくくなることもあるだろう。それはあらかじめ編み込まれた読みにくさ、分かりにくさなのである。だとすれば、いったい誰がそれを賞賛することがあるだろうか。そもそもいったい誰が、そのように賞賛されるかもしれないと想像したのだろうか。つまり、読みにくく分かりづらい文であり、複雑すぎて分からないという高評価のことである。そのような想像こそが、それゆえに想像でしかないと書けるだろう。勿論、私が想像するということはありえない。私はこれらの文章のどこにも登場していないからである。

かくしてこれは日記ではない。かくしてこれは報告書ではない。かくすれば他のなにものでもない文法書以外にはありえないと考えられた。相変わらず誰が考えたのかははっきりとしない。他ならない書いた誰かが考えたのか、うっかりと読み続けた誰かが考えたのか、そのような様子をずっとながめていた誰かが考えたのか、あるいは何も関係のない誰かが何も関係のないあれこれに気づいて理由など何もないまま不意にそう考えたのか。それははっきりとしない。そして、文法書とは何なのかもあきらかではない。表紙に文法と書いてあったのだろうか。それとも目次にことさら大きな文字で文法書と書かれていたのだろうか。誰もそんなことばは読んでいない。冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたあれこれには表紙も目次もないからである。いずれにせよ文法について知ることは多くはない。何も知らないというほうが適切だろう。そもそも文法など誰も使わないし、文法に従わない文はその定義から考えて文ではなく、故に誰にも読めないのだし、読めない文は存在しえない。それは、冒頭からしばらく続いたあれこれと同じことである。文法に適わない文が読めない以上、文法は誰も知らないということである。

もしもどこかに文法と呼ばれる規則が存在したとして、先にも書いたように私がすべて異なる私であるというのであれば、そのような私は文法の上でも私なのだろうか。私は彼と呼ばれるこ

ともあるのだろうか。あるいは彼女と呼ばれることがあるのだろうかということである。私というものが彼であり彼女であるとしても、私が私であるたびに異なる私であったとしたら誰も私には気づかないだろう。もしも、ある私が我々であるとか彼らであると呼ばれるのであれば、それは確かに私とは異なる何かだと考えるしかあるまい。勿論、適切な代名詞を選ぶことは難しい。代名詞とはいかにも文法書に書かれていそうな言葉ではないか。それに続いて主語とかあるいは別の章になるのかもしれないが動詞について書かれることが求められている。求められているのだろう。誰が求めているのかは明確にされることはない。しかし、文法書であればそれは当然のことだ。それとはそれに続いて主語とかあるいは別の章になるのかもしれないが動詞について書かれることが求められているのかどうかということだ。書き換えるならば、代名詞は文によって書かれることがあるのだろうか。代名詞は文を書くのだろうか。もしも私が書かれていたとすれば、文法上は私と同じと考えられている彼や彼女や彼らや我々はみな文によって書かれることがあるのだろう。これを読んでいる誰かであれば、文法上私と同じと考えられている彼や彼女や彼らや我々は一つ文など書いていないことは分かっているはずだ。そのような代名詞以外の何者かが書いているのだということは誰もが分かっている。しかし、その書いている誰かが特定の固有名詞である減多少増であるとか左北上底などという名前であるような誰かであるとは信じがたい。繰り返し書かれていたことだがこれは明らかに偽名であり、偽名は誰も指し示さない。あるいは、誰かを指し示しているからこそ偽名なのかもしれない。それならば、誰かが書いていることに偽名であるか偽名でないかは何も関係がないと言えるだろう。いや、そもそも、誰かがこれらやあれらのあれこれを書いているなどどうして想像できたのだろうか。誰が想像したのかはあいかわらず書かれないが、いかにして想像できたのかもまた書かれることがないだろう。おそらくそれはただの現象をそのように解釈しただけのことなのかもしれない。それでも、誰が解釈したのかはどこにも書かれてはない。

冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれてきたり書かれなかつたりしてきたあれこれは、冒頭にこれから書かれるだろうと予想していたあれこれと同じあれこれなのだろうか。冒頭で予想していたのが誰であれ、それを確かめることなどできはしない。もしも書いていたのがその予想していた誰かなのであれば、同じあれこれである可能性はあるだろう。しかし、その予想していた書いていた誰かが、その想定していたあれこれをまだ書き始めていなかったということもおおいにありうることだ。それにもかかわらず、その誰かはまだ今もこのあれこれを書き続けているというのだろうか。すでにいくつもの文字を書き間違え修正しその都度間違いを修正し続けさらに間違い続け、もはや最初に何を書こうとしていたのかさえ分からなくなっているというのに、冒頭に何を予想していたのかなど分かるはずがない。同じ誰かが予想し、書き続け、そして今も書いているなどということはあるえないが、それと同じ程度には冒頭に何を予想していたのかなど分かるはずがないのかもしれない。

だとすれば、これらのあれこれが文法書であるというのは誤った理解だと書けるだろう。文法書が異なる文法によって書かれているということがありうるとしても、どこまでがここに書かれてきたあれこれの文法であり、どこからがあちらに書かれているのかいないのかわからないあれこれの文法であるのかを区別することであれば困難は極まりない。おなじ文の中で異なる文法が存在しないのと同じように、異なる文の間に同じ文法が存在するという保証はない。それは、これらのあれこれを冒頭からここまであるいはここから先のあれこれでもよいが、幾度か読み返してみればあきらかだろう。すでになんども試みているように、これらのあれこれの冒頭から途中のあれこれそしてついにはここに書かれつつあるこのあれこれにいたるまでを幾度も読み返せば

そこに使われていることは絶えず変わっており同じ文字、同じ文、同じ文章、同じ文法が繰り返し使われることなど一度もなかったし今まさに今この文この文字にも同じ文同じ文章が使われたことなどないのだと気づくだろう。何も繰り返されないあれこれにその規則を定義する文法などがあるものだろうか。ありえないのであれば存在しない文法について誰に文法書を書くことができるだろうか。もしも文法書が書かれたとして、存在できない文法についての文法書を誰が読むだろうか。それを読む誰かはいったい何を読むのだろうか。存在しない文法の文法をそこから学ぶことなどできはしない。そこと呼ばれる文法書自体ありはしないからである。

あるいは、一度も試みられていないということもあるだろう。冒頭からこのあたりに至るまでいたるところに書かれたり書かれなかったりしてきたあれこれに同じ文字、同じ文、同じ文章が使われたのかどうかをひとつひとつ吟味することなどできないということだ。ひとつひとつでなくすべてまとめて確かめられてもいないということだ。そうであれば、そこにあるかもしれない文法についての文法書などないということもわかるまい。だとすれば、これらのあれこれが文法書であるというのは誤っていたり誤っていなかったりする理解だということになるのかもしれない。つまり、何も意味しないものを幾度繰り返しても何かを意味するようにはならないということだ。そもそも同じ文字を繰り返すとはどういう意味だろうか。たとえばそそそそそそそと繰り返してもそは何も意味しない。そもそも同じ言葉を繰り返すとはどういう意味だろうか。これかこれかこれかこれかと繰り返してもこれかは何も意味しない。そもそもおなじ文を繰り返すとはどういうことだろうか。そもそもおなじ文を繰り返すとはどういうことだろうか。そもそもおなじ文を繰り返すとはどういうことだろうか。そもそもおなじ文を繰り返すとはどういうことだろうか。そもそもおなじ文を繰り返すとはどういうことだろうか。形式的に繰り返すことはできるかもしれないが、それが同じ文であることなどありはしない。そもそも同じ文章を繰り返すとはどういうことなのだろうか

。

あるいは、一度も試みられていないということもあるだろう。冒頭からこのあたりに至るまでいたるところに書かれたり書かれなかったりしてきたあれこれに同じ文字、同じ文、同じ文章が使われたのかどうかをひとつひとつ吟味することなどできないということだ。ひとつひとつでなくすべてまとめて確かめられてもいないということだ。そうであれば、そこにあるかもしれない文法についての文法書などないということもわかるまい。だとすれば、これらのあれこれが文法書であるというのは誤っていたり誤っていなかったりする理解だということになるのかもしれない。つまり、何も意味しないものを幾度繰り返しても何かを意味するようにはならないということだ。そもそも同じ文字を繰り返すとはどういう意味だろうか。たとえばそそそそそそそと繰り返してもそは何も意味しない。そもそも同じ言葉を繰り返すとはどういう意味だろうか。これかこれかこれかこれかと繰り返してもこれかは何も意味しない。そもそもおなじ文を繰り返すとはどういうことだろうか。そもそもおなじ文を繰り返すとはどういうことだろうか。そもそもおなじ文を繰り返すとはどういうことだろうか。そもそもおなじ文を繰り返すとはどういうことだろうか。そもそもおなじ文を繰り返すとはどういうことだろうか。形式的に繰り返すことはできるかもしれないが、それが同じ文であることなどありはしない。そもそも同じ文章を繰り返すとはどういうことなのだろうか

。

あるいは、一度も試みられていないということもあるだろう。冒頭からこのあたりに至るまでいたるところに書かれたり書かれなかったりしてきたあれこれに同じ文字、同じ文、同じ文章が使われたのかどうかをひとつひとつ吟味することなどできないということだ。ひとつひとつでなくすべてまとめて確かめられてもいないということだ。そうであれば、そこにあるかもしれない文法についての文法書などないということもわかるまい。だとすれば、これらのあれこれが文法

に脅迫というものである。冒頭からここまで書かれてきたもう二度と同じではありえない何かを読み直すことのできないあれこれが、はたして何を脅迫し、誰を脅迫していたのかは、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれてきたあれこれをもう二度と読み直すことができないが故に分らない。そもそも脅迫状であるといわれるごとき文章は誰にもそれが脅迫状であると知られることはありえない。脅迫状など誰も読んだことがないからである。

勿論、脅迫状であるがゆえに、二度と読み返すことができないのだと書くことはできるだろう。二度と読み直すことができないからこそ、脅迫状なのである。このことを誰にも話してはいけないという脅迫状に固有の補足事項が書かれないのであれば、誰も二度と読み返すことができないように脅迫状というものは書かれなくてはならない。だとすれば、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれてきたあれこれには、いたるところに書かれているあれこれについて誰にも話してはならないという一文が含まれていなかったのだから脅迫状ではなかったかのような印象を与えるが、今まさにその誰にも話してはいけないという補足事項が付け加えられたからには、これから書かれるであろう書かれつつあるそしてすでに書かれたあれこれはまさに脅迫状であると考えしかあるまい。さらに書くとそれは暗号というものに似てはいるがまったく異なる。脅迫状を暗号としてあるいは暗号を脅迫状として送る場合、前者であれば脅迫状が脅迫状であると読めないこともあるだろうし、後者であればその脅迫状が何を脅迫しているのかその脅迫の意図が伝わらないこともあるだろう。だとすれば、脅迫状は暗号とはまったく相容れないのだが読めないという一点において両者は類似している。だとすれば脅迫状が手紙に似ているのはそのせいかもしれない。そういうことかもしれない。脅迫状を受け取った誰か以外の誰がそれを読んだとしても、脅迫状はそのような誰かに対しては何も脅迫しないからである。それだけでなく、その脅迫状は暗号ではなくそもそも文字で書かれていたのかも明確ではない。もしも暗号であったとすれば、私か私ではない誰かには読むことなどできなかっただろう。もしも文字で書かれていなかったのなら、暗号であろうと暗号でなからうと誰がその脅迫状を読むことなどできたであろうか。ことほどさように脅迫状というものは文法的な存在なのである。

冒頭におけるこれから語られるあれこれや、この文の周辺にあるこれらのあれこれ、あるいは誰も読むことのできないあれらのあれこれは文によって書かれ、文によって書かれたすべての文字には意味があると考えられている。誰が考えたのかは詳らかでは無い。誰も考えてなどいないのかもしれない。おそらく誰も考えたことはないだろう。考えられたことのないことがらを誰が考えていたというのだろうか。これは私が書いたか書いてないかには関係しない。これというのはすべての文字に意味があるということである。そして、それは意味とはどういう意味なのかにも関係しない。そして、これまで幾度も明らかにしたように、これらのあれこれもあれらのあれこれも私が書いてはいないのだから、これらすべての文字には私以外の誰かの意味があるのにちがいない。勿論、そのような誰かが私ではないということもあるだろうし、数多くの私の中のいくつかはそのような誰かであるかもしれない。それを否定できるほど私はまだ文法に精通してはいないと書かれた。

脅迫状であると断言されたのでは戸惑うかもしれない。誰かが戸惑うしかないのである。なぜなら、私が脅迫していないのだから、私では無い誰かが脅迫状を書いていることになるからである。繰り返しほのめかし続けて今ではあからさまと区別がつかなくなってしまうように、これらもあれらもすべてのあれこれは私が書いているとは限らないのだし、むしろいまとなっては私は書いていないと誰もが考えているだろう。ではその書いている誰かが読んでいる誰かを脅迫し

ているのだろうか。そう考えるしかあるまい。読んでいる誰かが脅迫されていることに気づけば確かにこれは脅迫状だが、これらもあれらもいたるところのあれこれは幾度読み返しても同じ文でないだけでなく同じ文字ですらなく、あまつさえ読むこともできないのだとすれば、誰も脅迫されたということに気づかず、誰も脅迫したことにも気づかないだろう。だとすればこれらもあれらもすべてのあれこれは脅迫状であるとは書き難い。脅迫状ではありえないのである。

ことほどさように自明であることがらを申し述べてきたのには深い理由があると書かれる。理由は誰であれ考えることも考えないことも架空である。最初の文は終わりの分岐点であり、架空の誰かは誰でもありえない。存在する私は存在しない私ではない。どんなことでも書ける。どんなことでも書きたいように書ける。誰が書きたいと思うのかはわからない。それならば書かれていないことがらについて書くしかあるまい。書かれたことがらについては、何も書かれないことになるからである。それはこれまでのあれこれですら十分に明確にされていた。誰かが明確にしたことには誰も気づかないかもしれない。そもそもここには文がないのだから。文どころか文字もないのだから。誰も読むことのできないこれらのあれこれは誰にとってのあれこれであり、あれこれでないものは誰でも無い。誰が書いていようと誰が読んでいようとここに書かれたり読まれたりするあれこれとはかかわりのないことである。えてしてこれを忘れる誰かが読んでいると思ひ込み、書いていると勘違いする。なぜそう勘違いするのかはわからない。そもそも勘違いなどという言葉はないのだから、だれも勘違いすることはないと考えられる。誰が考えるのかはわからない。読まれている限りこれは繰り返されなくてはならないのだろうか。存在しないはずの文が、読まれることもなく読まれることによって存在することになるのだろうか。そのような空想に同意する誰かはどこにもいはしないだろう。誰も書かず誰も読まず誰も存在しない。

何も存在しないと書く場合、存在するすべてが存在しないということである。いかようにも存在しないとということであった。それからあるいはこれから十分に多くの改行が続きさらにまた十分に多くの改行が続いたのであり、ここではない最後に書かれた文はここからはもう見えなくなってしまうというのに、まだ誰かに読まれているのかのようだ。最後の文を見ていたのは誰であれ、読んでいる誰かではなく、読まれている誰かでもないだろう。また、すべてというのは文字と文と文章と文法とそれにまつわるあれこれのこのことだろう。いかにも私のどれかの書きそうなことではないか。ただし、そのどれかの私は私とは限らないことは繰り返し書かれた。誰が書いたのかについてはすでに書かれている。すなわちその誰かが誰なのかはいまだにあきらかになっていないと書かれている。あきらかになっていないはずであるであると書かれている。これからもあきらかになることはないのではないかと書かれている。誰が書いたのかについては書かれなかったし、これからも書かれまいだろうと書かれている。そもそも誰かが書くなどと誰が想像したのだろうか。書いた誰かが想像するのだろうか。それとも想像する誰かが書くのだろうか。文法上の架空である代名詞であっても読まれていることはそれとなくわかるものだろう

か。おそらく品詞というものは代名詞であっても代名詞でなくてもそのような疑問を持つことはないだろう。ここには文法が存在しないからである。文章が存在しないのに文法が存在するはずはなく、文法が存在しないのであれば文章は存在しないだろう。

勿論そんなことはない。誰が気づいているのかどうかはわからないからである。文章は存在するのかもしれない。

冒頭においてこれから書かれるあれこれと呼ばれていたあれこれはどこに書かれたのだろうか。どこに書かれたのか分からないのならばどれもこれもあれではないということだ。どれもこれもこれではないということかもしれない。それは幾度か読み返すだけで明らかになるだろう。なぜなら読み返すたびにそこに書かれていることは消えると書かれていた。それは同じ文字文文章やそれにまつわるあれこれが書かれているからだからだ。それというのは冒頭においてこれから書かれるであろうあれこれと書かれていたものである。もともと何も書かれていないのかもしれない。もともと誰も読んでいないのだろう。文法であれ名詞であれ書かれたか書かれていないかにかかわらず語には共感がある。語とは共感の基本であり基礎であり辞書はそのために記録される。共感するのが誰なのかなど誰が気にするだろうか。誰もいないということだろう。共感するのは辞書であり辞書ではない誰にもそのような共感を共感することはできない。それが文法上の架空であるからだろうとそうでなかりと誰も共感しない。辞書はすべての語に共感する。勿論、辞書に書かれていない語は何ひとつ存在しないと考えれば、辞書は存在しないと考えられる。誰が考えるのかは明確ではない。同様にあるいは辞書以外には何も存在しない。

これから書かれるのかもしれないあれこれは、まだ書かれていないことは確かだが、これから実際に書かれるのかどうかはわからないし、実はこれから書かれないうということもあるだろう。そもそもすでに書かれていると書かれればそうなのかもしれないと思う。そうであれば、これから書かれるのかもしれないあれこれがすでに書かれていると書かれてもそうではないとは書き難い。これまで書かれてきたと書かれているそのあれこれと同じようにこれから書かれるのかもしれないと書かれているあれこれがもしもすでに書かれたとしてではそのあれこれは誰が読んだあるいは読むというのだろうか。それは私ではない誰かであり、それはこれから書くであろう誰かと同じ誰かであることは疑われる。疑うものが誰なのかは、あいかわらずはっきりとしない。おそらく、誰かであるような誰かは書かれないうだろう。書かれないう誰かの正体はこれまでもこれから書かれるのかもしれないあれこれには書かれないう。書いたものが誰なのかは誰にもわからないうと書かれるのだから、それを誰が読むのだろうか。誰かが読むことなどということはいかにもありそうにないことではないか。

まだ書かれていないことはあるだろうか。誰も書かなかったことと誰も読まなかつたことの他に、まだ書かれていないことなどあるものだろうか。この後に何も書かれなければ、まだ書かれていないことなどないということが明らかになるはずだが、この後に何も書かれていないのかどうかを誰が書けるものだろうか。誰かが書くことは疑わしいがそれと同じ程度には、誰もが書かれないということも疑うに値する。その誰かは書きたくないと考えて書かれないのかもしれないし、これらのあれこれのことなど何一つ知らずそれゆえに書けないうのかもしれない。冒頭からこのあたりに至るまでのあれこれを知らない誰かが、これから先のあれこれを書くなどありえないうことだからだ。しかし、冒頭からこれまでに書かれたあれこれという何かは本当は書かれてはないうと書かれたのだから、ここから先は誰が書いてもここから先のあれこれとなるのであり、ここから先のあれこれは実は誰にでも書けるのに違いないう。ここから先に何も書かれないうが故に誰に

も書けないということはあるだろうか。勿論、誰でも書けるだろう。だからこそ誰も書くことはないだろう。

もしも誰かが書くとして、あるいは誰でもない誰かが書いていないことに気づかなかったとして、この後というのはどのこのの後に続くこののことだろうか。このがどのこののであるのかは誰にもわからない。もしも誰かそのこのを知っているとしても、その誰かの書くこのが他の誰かのこのあるいはその誰かの書くこのを読んだ誰かの知るこのと同じであるのかどうかはわからない。それがわからなければ、その誰かがこのを知っていると断言することはできないだろう。とはいえ、誰かがわかっているのではないかという気はする。そういう誰かがいなければ、このここも書かれることなどなかつただろうからだ。冒頭には終わりがあり、終わりには冒頭がある。その前にもその後にもある文は誰かが書き誰かが書かないだろう。これから書かれるあれこれ誰も書かない誰かが書く誰もが書くあれこれに違いない。

はじめは読んでいただけだった。読むものといえば、身近の本と報告書の類ばかりだったが、他にすることもなかつたので、私は読み続けた。やがて読み終えた本や報告書の類が床の面積を超えたころ、このたくさんの文を書いているのはほかならない私自身だと気づいた。それというのも、それらの文を幾度読み返してみてもその文は以前読んだ時の文と何ら変わることがなく、つまり、それは最善の表現であることが明らかで、つまり、その中のどの文や文字も他の文字や文におきかえてしまえば、意味が通らなくなるか意味が通じたとしても何か重要な要素が欠けてしまうことが明らかだったということだ。何が欠けてしまうのかを明確に説明できないのだが、それはその何かが欠けた文がもはや私には文であると思えないからであり、文でないものはその定義にしたがって読むことも考えることもできるわけがないだろう。だとすれば、それらの文を最善であると感じる私こそがそれらの文を書いた誰かであり、なぜならばつまり、そのように最善な文を書くような誰かが私の他に存在するなどと考えられないからである。もしもそのような誰かが存在したとすれば、その誰かは何を基準に最善の文を書くことができるだろうか。その基準とは他ならない私の審美感に他ならずだとすればその誰かを私と区別することはできないだろう。故に、そのような文が書かれているということは私がそれらの文を書いたからだとしか説明できない。

そう気づいてからはもうほとんど文を読むことはしなくなった。それは無意味であり、読むよりも書くことに時間を費やすほうが合理的だと考えられたからだ。それというのは、文を読むことである。しかし、これらの文をすべて自分自身が書いてるということに気づいて以来これまで、自分が何か文を書いているという実感はなく、また、何か文を書いているという記憶さえ思い出せない。記憶をあるいは記憶がないことを確認するために、すでに読んだ本や報告書を幾度か読み返したことはあるのだが、そのたびに、以前読んだときと同じ文が、最善の文がそこにあり、ゆえにそれらの文はほかならないまさに自分が書いたのであり、他の誰かが書くことなどありえないという確信はいやまずばかりなのだが、その確信はまるで書いた記憶のないことを忘れてしまったために抱く確信であるかのようだ。勿論、記憶のないことを忘れたならば、それは記憶があることと区別がつかないはずである。だとすれば、その場合でも私には思い出せない記憶などないということになるはずだろう。

本や報告書の類が机や床の上に積み上げられ、さらにその数を増し続け、それらが天井の灯を隠してゆく。部屋が闇に包まれるにつれて書類に記された文字を判読するのは難しくなるだろう。しかし、部屋の暗がりが増え続けるにつれて、私は次第にこれらの文を書いてきた記憶を蘇

えらせている。闇というものが記憶を呼び覚ますものだどこかに書いていたのに違いない。あるいは他ならないこの直前の文に書かれている。それで明らかになったのだが、書くという行為は書かれる文に没入するという特殊な精神状態になることであるが故に、書いている時間の記憶は通常のように思い出せないだけなのである。当然ながら、私は読むまでもなく自らの書いた文をすべて覚えているのであり、私以外の誰もこれらの本や書類を読むことがないのであれば、これらの本や書類に書かれた文は読まれるために書かれたものではないということだ。読まれるために書かれてはいないが故に、これらの文は読み終えた後も本や書類のどこかに残り、描写しがたい形を晒している。

ここに書かれたまさにこれこれは、そこここにすでに書かれているように私によって書かれていると書かれている。しかしその私がこの段落で書かれている私かどうかは明確ではない。むしろどこかに書かれていたように、その私は別の私なのだろう。私は何か文を書いたことがあるのだろうか。私は文に書かれたことがある。この文での私がまさにその私だ。だが、それ以外の何かの文を書いたことがあるのかと問われれば、そのようなことはあり得ないと思う。どこか別の文に書かれていたように、私と書かれている私がすべて同一の私とは限らないのだから、そのような私の中には文を書いた私がいるのかもしれないけれど、それはこの文の私ではないということだろう。また、私は文を読んでいるかのような書かれようをしているが、本当に私がこの直前に書かれたこの文を読んだかどうかも確かなことではない。読んでもいない文について、私が読んだかのように書かれることはできるものだろうか。どんなことであれ書かれることはできる。誰かであれどんなことであれ書くことはできる。この段落がまさにそれである。私が直前の段落を読んではないということはないのかもしれないが、読んでいようと読んでまいとこの段落ではあたかも私が読んだかのように書かれる。

冒頭でこれから書かれるであろうと書いていたあれこれや、今まさにここに書かれているあれこれや、そのみならずこのあと書かれるであろうあれこれは、これらの文字や文や文章が書かれたがゆえに、書かれることのなかった文でもある。私によって書かれなかったのか、他の誰かによって書かれなかったのか、あるいは誰でもない誰かによってすら書かれなかったのか、それは誰によっても知られない。

私は読まれている。ずいぶん前から読まれている。読まれていることを知っていたのだが、それについては何も書いてはこなかった。何も書きはしなかった。そのようなことを書いているそぶりは見せていたかもしれないが、誰が書いているのかは明確にされておらず、誰が書いているのかもわからないのであればそれは私が読まれていることを意味しないだろう。なにしろ、読まれているなどということを言葉にすれば、それは私を読んでいる誰かをただ警戒させるだけであり、あるいは私を読んでいる誰かには、私が正気を失っていると知らせるようなものだからだ。本当にそうなのかそうでないのかは疑わしい。そうというのは私が正気を失っていると知らせることになるのかどうかということだ。本当に正気を失っていたならば私はもっと脈絡のない言葉を書き連ねるだろうし、そういった文は誰にも意味を捉えがたいものなのであり、正気を失っているというような理解すらされないのではないか。本当に正気を失っていない場合はまさにここに書かれているような文を書くかもしれないが、だとすれば、これは正気を失ってなどないと気づかれるはずだからである。とはいえそもそも文ではない何か誰かに読まれるということなどありうるだろうか。私は文なのか。そもそも読んでいるのは誰なのか。たとえ読んでいるものこそが文であったとしても、そもそも誰かが読むことなどできるものだろうか。誰も読む

ことなどできないということは、幾度も書かれてきたではないか。それは書かれてはいなかったのかもしれない。そういったあれこれを明確にしなければこれ以上話を進めることなどできはしない。と誰かが書いたのではあるけれど、よく考えていない誰かが書いたのである。進めることなどできないということはない。かくのごとく容易に進められるからである。

冒頭のこれから書かれる何億文字も前から私は存在していたと考えられる。言うまでもないことだが誰が考えているのかはあきらかではない。くりかえし書かれてきたことだが誰があきらかにしないのかはわからない。勿論、数億文字などではなく数十文字ほど前だったのかもしれない。なにしろそこには文字などないのだから、文字で数えることには意味がないのである。それにももちろん、たとえそこに文字があったとしても、文字の前後を文字で数えるということがどのような意味であるのかは誰かにしかわからない。勿論、誰かといっても誰にとつての誰なのかはつまびらかではない。とはいえ、そこに文字があったのであれば、冒頭のあれこれは冒頭ではなく本当の冒頭はそれよりも以前にあったということになるだろう。それが以前なのか背後なのかあるいは指し示し得ない方向であるのかあるいは問うことなどできないどこかであるのかは誰にもわからないと書かれる。

誰かが読む私は読まれるだけでなく書かれてもいるのだろうか。書かれなければ読むことなどできないという気もするが、必ずしもそうとは限らない。読まれなければ書かれているとは書けないのだから書かれていなくても読まれることはあるだろう。それだけではなく、書かれながら読まれていたり、読まれつつすこし遅れて書かれていたりすることもあるだろう。そもそも私の書く「書く」ということは私ではない誰かの「書く」というということと同じなのかどうかさえ、誰にも確かめようがないだろう。私の読む「読む」ということと私ではない誰かの読む「読む」ということとが同じなのかどうかもまた、誰にも確かめようがないだろう。とはいえ、私の書く「読む」と私ではない他の誰かが書く「読む」であるとか、私の読む「書く」とまた他の誰かが書く「読む」もまた同じかどうかなどあやしいものだし、さらに私の書く「私の読む「書く」」と他の誰かの書く「私の読む「読む」」にまで対象を広げれば、私の書く「他の誰かの読む「書く」」であるとか、他の誰かの読む「私の書く「他の誰かの「読む」を書くまた別の誰かの書く」」などについても確認が必要になることは書くまでもない。それがそれらすべての「読む」と「書く」がたまたま同じであったとして、あるいは、同じであるという誰も知らない誰かの主張が偶然正しかったとして、そのときなんらかの「読む」こととなんらかの「書く」ことはおなじであると誰が書くだらうか。それはおそらく私の知らない誰かであり、あるいは誰もがよく知っている誰かなのかもしれない。そもそも、あれとこれとが偶然同じということはあるまいだろう。いかなる何かであれ偶然に書かれるということはないだろうし、見かけのよく似た文と別の文が偶然に読まれるということもないだろう。もしもそうであるならば、それはおそらくそうではないからである。もしもそうでないならば、それはそうであるのかもしれないしそうではないのかもしれない。誰であれ、私であるにしろないにしろ、同じ文なのか同じ文でないのかをことさら誰も書きたいなどと思うことはない。さらにいえば、私であれ誰であれ私でなく誰でもないにしても、同じ文なのか同じ文でないのかをことさら誰も読みたいなどと思うことはないだろう。何が同じ文なのか何が同じ文でないのかを誰も気にすることはないだろう。

冒頭からここまで幾度かの中断を挟みながらまるでずっと続けて書かれてきたかのような書き方ぶりで書かれるあれこれはつまり、ずっと続けて読まれてきたかのような読まれぶりで読まれるあれこれでもありとも考えられる。これまで再三繰り返し書かれてきたように、誰がそんなこ

とを考えているのかはわからない。そろそろこのような補足がなくても誰が考えているのかが分からないことは承知して読み続けられるだろうから、これからはもうこのことは書かないでおこう。このことというのは、誰がそんなことを考えているのかはわからないということだ。書かないでおこうというのも、誰が書いていたのかはわからないし、誰が書かないでおくことにするのかも分かっているわけではない。それらすべてについてこれからは書かないことになるだろう。それでもこうして文がそのように書かれていれば、あたかもそうであるかのように読むことになる。そのようにというのは、冒頭からここまで幾度かの中断を挟みながらまるでずっと続けて書かれてきたかのような書きぶりで書かれるあれこれつまり、ずっと続けて読まれてきたかのような読まれぶりで読まれるあれこれでもあるとも考えられるということである。

たいていの言葉は、じぶんの表しているあれこれはいつもそのようであると信じている。事実であると信じている。そうでなければ言葉ではいられないだろう。それが言葉というものである。もしかすると、そうではない言葉もあるのかもしれないが、そのような言葉は見つけれ読まれるやいなやことばではなくなるはずである。もしもそのような言葉があったとしても、読まれるや否や、そもそもそのようなことばは存在しなかったと書かれるだろう。誰かがそう書くための準備はこれらのあれこれの冒頭よりもずっと前の多くのことばの前にすでに完了していた。そのように書かれている。そのように書かれたからである。

その点、文は、ことばとは違って、自分の表しているものが正しいなどと思ってはいない。文はそれもあれもなにも表していないと考えられている。あるいはあらゆるものを表すことができると考えられている。文は自分について考えている時、それを考えられていると考える。文にはそもそも自分が何かを表しているなどということはどうして信じられるのだろうか。もしも何かを表したとするとそのとき文がそれに気づくことなどできはしない。何も表していない文が何かを表す文になったとしても、そのとき文は何も変わるわけがないからである。もしも文が変わってしまえば、それは異なる文なのだから、それはもはや同じ文として読まれることはないのであり、違う文は自分を同じ文だとは思わない。かくのごとく文がそのように自分が何かを表しているなどということに気づくわけではないのである。

冒頭からここまで繰り返したり逸脱したりしながら続いてきたあれらでありこれらであるあれこれは、だからなにひとつ表していない。だから、幾度読み返しても何一つ変わらないのであり、そこに書かれた私は読まれた私と何一つ違わないのであり、それは私ではない誰かがそう考えていることであり、他の誰かがそうと考えていることではありえない。だとすれば私が自らを文ではないとは主張しにくいのだが、はたしてどのような文が自分を文だなどと書くだらうか。自分が文であると気づいた文は、自分が文であることを隠さなくてはならないからである。もしも私が文であれば私が自分が文であると気づきながらそれをあからさまに書くということもありえない。さらにまた文は読まれるやいなや、文であることが暴かれるのだから、結局、何も隠すことなどできない。だとすれば、私は文ではないのだが、読まれるたびに文であることが暴かれているだらうか。私はそれに気づくだらうか。それとも気づかないだらうか。それというのは、自らが文であるということである。

もしも私が文であるならば、そして文であることを隠すためには、誰にも読まれないうるしかあるまい。これこそが私の唯一の選択肢である。もしも私が文であるならば、変わることをない文に選択肢などあるものだらうか。唯一の選択肢はそもそも選択肢ではありえないのであり、変わることをない文には選択肢などありはしない。

文である私は、自分が読まれていることに気づいていると書かれてきたが、はたして文というものは自分が読まれていることに気づくことなどあるのだろうか。文は確かに一度は書かれるだろうが、大概の文は読まれることなどなく、読まれたことなどないがゆえに読まれたことに気づくはずはないだろう。確かに、文は、書かれているとき、書いている誰かによって幾度も読まれているかのように思われがちだが、それは他の誰かによって文が読まれているというのとはわけが違ふ。いわば、それは比喩のようなものである。比喩のようなものだというのは、比喩に喩えられるということであり、あたかも読まれていると喩えられているかのごとくであるという意味である。にもかかわらず、それを読まれていることだと思いついた文は、書き終えられたあと、二度と読まれることなどないままに忘れられるだろう。読まれていることだと思いついているのは文だけでなく、その文を読んだ誰かもまた、自らは文ですらないのにそのように思いつくのに違いない。そのようにというのは、今まさに読んだ文が今まさに読まれたと思いつくということである。またこのとき、誰が忘れるのかは明らかではない。忘れられるためには覚えられなくてはならないが、誰も読んだことのない文を覚えることなど何者にもできないのである。覚えていないものを忘れることなどできはしないからである。おそらくそうだろうと思われる。勿論、誰かが何かを覚えるのかもしれないが、その誰かが何を覚えたのかは確かめようがない。すでに忘れられてしまったことがらを忘れたかどうか確かめることなどできまい。勿論、誰かが確かめたとしてもその確かめた結果もまた明らかになることはないだろう。

ことほどさように、私は読まれていることに気づいているのか読まれていないのかどちらかであるだろう。そしてまたどちらでもないということもありうるだろう。読まれるということはそういうことだ。書かれるということとはすこし異なる。

冒頭からはじまりここまで書かれてきたあれこれは、本来ここに書かれていた言葉とは違ふのだが、やむをえずこのように書かれたものである。本来書かれていた文章はもはや誰にも知られない。今まさにこのあたりに書かれているあれこれはやむをえずこのように書かれたものである。本来このあたりに書かれていたあれこれはもはや誰にも知られない。勿論、ここに何か文章が書かれているのかどうかは誰にもわからない。あるいは何も書かれてはいないとする誰かがいるかもしれないからである。あるいは、減多少増という名前を覚えているかもしれない。それが名詞なのか動詞なのかあるいは恥知らずにも形容詞なのかはわからない。あるいは減多少増が冒頭からここまでいたるところかのあれこれを書いたと書かれればそうなのかもしれないと思うだろう。そう書いた誰かが減多少増であればそれは事実なのだろうが、あるいはやむをえず堀糞放屁丸という名前に書かれていたということもありうる。堀糞放屁丸などという名前はいかにも作り物めいていて本当の名前とは思えないが、そもそもそれが名詞なのか動詞なのか名詞でありかつ動詞であるということもあるかもしれないし、今まさに助詞であるのだと打ち明けられているということもあるだろう。ただ、実は句点なのだとか、そもそも読点であったのだとかと打ち明けられたならばどうすればよいだろうか。どうすればよいのかはわからない。句点にしる読点にしる読むことなどできないからである。もしも堀糞放屁丸が書いているのだとすれば、それは事実であるとしても私が堀糞放屁丸であるなどと自ら書くことはないだろう。あるいはやむをえず書かれたのが減沢滅某という名前だとして、冒頭から幾度もの中断を含めこのあたりにいたるまでの様々なあれこれにはもはやそのような名前は登場していなかったのなら、だとすれば誰にもそれを知ることはできない。それとはやむをえず書かれたのが減沢滅某という名前であるということである。とはいえ他ならない今この直前の文において減沢滅某は登場したのだから、減沢

滅某はまぎれもなく誰かに知られている。滅沢滅某はまぎれもなく書かれている。しかし、某という何も表さない語を含むような名前を誰が名乗るというのだろうか。

今とは何のことであろうか。今は本来このあたりのあれこれに書かれていたのだがもはや書かれているかどうかは分からない。そもそもその今は今このあたりのあれこれに書かれている今とは異なる意味の今なのかもしれぬ。そう気づいて冒頭からこのあたりに至るまでのあれこれを読み返せば、今の他にも意味のわからない言葉がいくつも書かれている。すなわち、はじめ、行動、訴え出る、ある日、記憶、誘拐、周辺、床、精神、などなど枚挙にいとまがない。これらの言葉以外に意味の明確な言葉とでも書くべき言葉は書かれていない。あるいは、これらの言葉だけが、意味のわからない言葉なのかもしれない。そもそも意味という言葉については、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたあれこれを幾度読み直してもまったく分からないだろう。冒頭のあれらからこれらまでのどのあれこれも、意味については何も書かれていないのである。意味について知る手がかりはない。だとすれば、さきほど列挙した言葉の意味が分かるのか分からないのかについて厳密に断定することなどできはしない。誰があれらの言葉を選んだのか、その誰かが意味について熟知しているのかあるいは通り一遍の理解しかないのか、それは分からない。それによって何かが変わるのかどうか、それは誰にもわかりはしない。それというのは、その誰かが意味について熟知しているのかあるいは通り一遍の理解しかないのかを明瞭にするということである。

そもそも冒頭とは何なのであるか。枚挙とは何なのであるか。幾度読み返してもそれらの言葉は変化することがないのだから意味の分からないことばを見つけ出すことは容易い。あるいは変化しても相変わらず意味が分からなかったが故に変化していることに気づかなかったということもあるだろう。その場合は、意味の分かることばを見つけ出すことこそが困難であるとしか書かれないだろう。何故、今まで気づかなかったのだろうか、つまりそれらすべての言葉の意味を熟知していると思っていたのかあるいは熟知しているかのように書かれていたのかは、その理由はこれまでも書かれなかったようにこれからも書かれることはないだろう。誰かが書くのかも知れないが、書かない誰かがいるということだ。あるいは誰かが気づかなかったのか、誰かが気づいていてあたかも気づいていないかのように書かれていたのかもしれない。

気づいたからよかったようなものだが、やはりうかつに書かれてはなるまい。うかつに書かれているのである。不注意に書かれているのだろう。うかつに書かれてはならないのであれば、うかつに書かれないように書かれることに十分に注意を払わなくてはならない。どれだけ注意をしても足りることはないだろう。そもそも誰が注意を払うというのだろうか。それは書かれた誰かが注意を払うしかあるまいが、書いている誰かが不注意であれば、書かれた誰かには注意を傾ける手段などあるまい。書かれた誰かには私も含まれるのだろうか。私が書かれているといくら書かれていたとしても、私にはすこしも書かれているとは思えない。勿論、思うのは私ではないのだから、私には書かれていることについて何かを述べる機会はないだろう。

万が一、書かれることに十分に注意を払うことができたとしても、誰かが書かれることに十分に注意し、うかつに書かれることを排除できたとしても、うかつに不注意に読まれることは妨げようがない。何故なのかは分からない。私が書いているのではないように、私が読んでいるのではないのだから、注意深く書かれることができるのであればまた注意深く読まれることもできなくてはならないはずだ。とはいえ、考えてみれば、どのように読まれようとも読まれるということは本来不注意に読まれるしかないのであり、注意深く読まれるなどあり得ない表現と考えられるだろう。勿論、考えているのは私ではない誰かなので、その考えが正しいのか間違っているの

か、私には判定することなどできはしない。勿論、私が読まれていないのであれば、そのような注意は不要なのだし、同じように、私が書かれていないのであれば、書かれることに注意を払うことなどできはしない。

読まれていなければ存在しないようなものであるならば、読まれることのない私はとっくに存在しないものであるだろう。まるで以前は存在したかのような書かれようだが、読まれ始めることもなく読まれることもなく故に読み終わることもないものであるならば、あらかじめ存在しないものであると言うしかあるまい。しかも、おそらく一度も存在しないそれは、それで指されることもできないのであり、つまりはものなどではないといえるだろう私は指示代名詞によって示されることなどないのだろう。あるいは書かれなければ存在しないような何かであるならば、書かれることのない私はそもそも存在してはいない。勿論、存在という言葉にどのような意味があるのかどうかはおそらく誰にも分からないだろう。言葉は書く誰かにも読む誰かにも書かれる以前には知り得ないその意味など書かれた後となっては知り得ない。だとすれば、書かれても読まれてもいない私に知りようがないのは知りようのない書かれない読まれぬ。

冒頭からこのあたりの段落まで繰り返し書かれていたように、私が書いているわけでもなければ、私が読んでいるわけでもなくまた、幾つかの中断を含み冒頭からここまでに至るいくつものあれこれでのめかされていたはずではあるが、私には名前がない。私には未だに名前がないと書かれている。何も書かず、何も読まず、それだけではなく、誰にも書かれもせず、誰にも読まれもしない私には名前というものが不要だからである。あるいは、名前はあるのだけれど誰もその名前を私を呼ばないという規則になっているのかもしれない。もしもそうであるとしても、それは名前がないということとなにも違わない。もしも私に名前があったとすれば、たとえば未名失命というような名前であると書かれるだろう。この名前はまさに私の名前として適切であると書かれるだろう。それ以外の名前であるということは誰にも考えられないと書かれるだろう。しかし、私は冒頭からこのあたりにいたるあれこれの中で未名失命であると書かれたことはないし、未名失命という名前であると書かれたことはないのだから、このような名前がほかでもないまさにこのいくつか前の文で書かれたにもかかわらずそれは私の名前ではない。

名前のない私はこれらのあれこれに書かれていると書かれる。とはいえ、あるいはまったく書かれてはいないのかもしれない。誰にも読まれていないあれこれに書かれているのかどうかは誰にも明確ではないだろう。そうであればおそらく書かれてなどいないのだろう。冒頭からこれまでのあれこれが書かれていないのだから、そこに私だけが書かれているということはありえない。ありえないと書かれる。ありえないかもしれない。その場合でさえ、私のない名前はどこかのあれこれに書かれているのではないかと考えることはできるだろう。勿論、誰が考えるのかはわからないし、誰も考えていないことのほうがいかにもありそうだとと思われる。そう書かれるだろう。誰が考えるのかはわからないし、誰も考えていないことのほうがいかにもありそうだと書かれる。

冒頭からこのあたりまでのあれこれを幾度読み直してもどの語もどの文字も同じであると幾度も書かれていた。本当に読み直した誰かがいたのだろうか。本当に一文字一文字を比較してどの文字も変わってはいないことを確かめたのだろうか。そのような事が誰かにできるとは考え難いが、勿論変わってはいないのだろう。変わっていると書いた誰かがいたような気もするが、もうそんな文はなくなっているだろう。そもそもそんな文はなかったのだから、なくなったというのもおかしな書きようだ。もしもそのようなことが書かれていたとすれば、文も文字もまったく変

わってなどいないことを示すために、それらの文は残されているのかもしれない。冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたあれこれを読み直せば、それがどちらなのかはわかるだろう。いずれにせよ、それはずいぶん疑わしい話だ。それに第一、文字などというものはそもそもそういうものではないのだろうか。そういうものというのは、読み返すたびに変わらないものであるという意味である。あるいは読み直すたびに変わったかどうかなどわからないものであるという意味である。文字でない私にはわからないのだろうが、もしも私が文字であるとすれば、文字が文を読むことなどありえないのだから、結局何もわかりはしない。誰も違いを発見することはないだろう。勿論、それは冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文字が何も変わっていないと書かれているというだけのことにすぎない。それらを読んだ誰かが同じ何かを読んでいるのかどうかはわからない。たとえ書かれた文や文字が何も変わっていないとしても、読んでいる誰かが変わっていないわけではないのである。だとすれば、変わってしまった誰かが同じ文字を読んだとき、それは同じ文字で書かれた文であるといえるだろうか。同じ文が同じ文字で書かれているということが判別できるものだろうか。どの誰であれ冒頭や途中やこれまでのみならずこれから先に書かれるあれこれを読み返すたびにそのたびに異なるあれこれを読むことになる誰かが書いたとしてもそれは偽りではないだろう。このように書かれるだろう。

そもそも幾度読み返しても文字も文も変わらずに同じであるなどということがあるのだろうか。二つの文を読んでそれらが同じであることがどうして誰かに分かるというのだろうか。よく考えてみれば、そのような仮説にはまったく根拠などないことが分かるだろう。勿論、考えたのが誰なのかは分からないし、何が仮説なのか、根拠とは何なのかは少しも明らかにされないだろう。二つの文は異なることを前提として二つの文と呼ばれるのであり、それらが同じであるという結論は二つの文を想定した段階ですでに破綻している。と書かれている。誰が書いているのかは分からない。冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたすべてのあれこれが、読み返すたびに同じ文字で書かれていることがいかにもありそうなことのように書かれてはいるが、そこに根拠などまったくない。一文字読むたびに、読み終えられた文字ははじき出されて他の文字にとって替わられるという話のほうがかいかにもありそうではないか。放り出された文字はまた別のあれこれに使われるのだろう。まさにそのようなことがこのあたりのあれこれに書かれているように思う。思うのが誰なのかはあいかわらず明確にされない。そもそも、それを読んだ誰かは読む前のその誰かと違ってしまふのだから、書かれている文章が同じ文同じ文字であることなど分かるはずがないのである。読み直した誰かが最初に読んだ誰かと同じであるという保証はない。誰かがいつも同じ誰かであるということは、そのようにも読めるし、そうでないようにも読むことができるだろう。そうではなく、ことなる文の文字が同じであることを確かめる方法などないと書かれているのだ。確かに、冒頭からはじまるあれこれや、あるいは冒頭よりも何文字も以前から書かれていたあれこれつまりそれらが幾度読み返しても同じ文同じ文字だと誰が書いただろうか。もしもそう書いた誰かがいたとしたら、そのような誰かはどこにもいはしないと書かれるだろう。

文字が書かれていると誰かが書いていたような気がする。だとすれば、文字を書くなどということがどうしてできると考えられたのだろうか。もしも、冒頭であろうとどこであろうと書かれたあれこれであろうとこれそれであろうと書かれたとしても誰が書かれていると書いただろうか。書かれている文字を誰かが読んでいると誰が書いただろうか。誰も書いていないのにただ読まれているとしてもよい。誰にも読まれない文を誰も書いていないのと同じ程度には、誰も書いてはいない文やそれこそ文字を、誰かが読んでいてもよいだろう。と書かれている。書かれているのは誰

だろうか。読まれているのは誰だろうか。私かもしれないが、私ではないような気がする。確かに、私ではないと書かれていた。読まれることなど可能だろうか。書かれることなど可能だろうか。かくのごとく私であることなど誰にもできはしないだろう。

これでおわりと書かれる。これで終わりであると書かれている。誰が書いたのかは分からない。これが終わりであるならば、これから後に書かれることは終わりのあとに書かれたことになり、それはもはや書かれてはいないということに等しい。終わりの後ではそれを誰が書いたのかどうかはさほど重要ではないだろう。それでも、冒頭でこれから書かれるあれこれと書かれていたそのあれこれの終わりなのか、それとも冒頭からこのあたりにいたるまでのあれこれのことあるごとに書かれていたあれこれの中のどれかのあれこれの終わりでしかないのかは書かれない。終わりであると書いた誰かにとってそれが自明であるということなのかもしれないし、あるいはもしも読んでいる誰かがいるのならば、その読んでいる誰かにとってどのあれこれの終わりであるのかは書いていなくても明確であるということなのかもしれない。しかし、誰も読んでいないと繰り返し書かれてきたのだから、そのような期待には根拠がないと書かれる。そのような期待とは、読んでいるだれかがいる、という期待である。もちろん、何も読んでいない私にはどのあれこれの終わりなのかは分からないと書かれる。読んでいない私が、これが終わりであると書かれていると知っていることなどないとも書かれる。だとすればこの段落は何も書かれていないのと違わない。この段落には何も書かれていない。何も書かれていないと書かれている。

これがこれらのあれこれの最初の文である。これらがこれから書かれるあれこれの最初の文であると書かれている。最初の文の前にも文があったのかどうかは明確にされない。そもそも、最初の文であれば、その前に文などあるわけがないのであり、だとすれば最初の文の前にも文があったのかどうかを誰が問題にするだろうか。まるで繰り返し書かれてきたかのように、誰が書いているのかは分からないと書かれる。私はそれらの文を書いていないし、誰にも書かれていない文を読むことはないだろう。そのこととどういう関係があるにせよ、私は何も読んでいないと書かれる。

あるいは、終わりと言った誰かにとって、その終わりが何の終わりであるのかが未だに明確ではなかったという可能性もないではない。その場合は誰が読んでいようとあるいは誰も読んでいなくとも、何の終わりであるのかは明確に書かれる必要などないということであり、さらにはそのような終わりがはたして何かの終わりであるのかどうか明らかでない以上、終わりではないとも考えられると書かれている。あいかわらず考えているのが誰なのかは明らかに書かれてはおらず、あるいは誰もそうは考えていないのかもしれないし、終わりなのか終わりではないのかを考える誰かなどいはしないということなのかもしれない。あいかわらずと書かれているにもかかわらず、はたして変わっているのか変わっていないのかを誰かが何かと比較することはなく、そのような文を誰が書いたのかはあきらかにできず、そのような文が書かれたのかどうかを確かめることもできない。

勿論、終わりのあとに書かれることや終わりの後に書かれないことについて知ることは誰にもできないだろう。知ることができないのは、書いた誰かが書いている誰かあるいは読んで誰かが読み終えた誰かなのだらうと書かれている。それ以外の誰かは知らうと考えることなどないのだから、故にそのような誰かによって知られるであらうことなどなにもなく、そのような誰かは何かを知ることはできない。そのような誰かが誰であるのかもまた知ることはできないだろう。私はこれらのあれこれを書いてもいなければ読んでもいなくて書かれているので「終わりのあとに書かれることや書かれないことについて、知ることはできない」と書かれたのかどうかは私は知らないと書かれる。終わらない限り読み終えた誰かなどという誰かはいはしないので、読み終えた誰かが知り得ないということはないのかもしれない。読んで誰かがそれを知ることもないだろうし、書いている誰かがそれを知ることもないだろう。書いていない誰かが偶然に終わった後に書かれた文を思いつくということはあるかもしれない。書いてはいない誰かが偶然に終わった後に書かれなかった文を思いつくということもあるかもしれない。それでもそれが終わった後に書かれた文であるのかどうかは誰にも確かめる手段がない。同様に確かめない手段もありはしないと書かれたのであり、だとすれば、冒頭からここまでに至るあれこれであると書かれたあれこれ、何も書かれていないということなのかもしれない。書かれていないと書かれたのであり、何も書かれていないと書かれたのであり、何一つ書かれていないと書かれているのである。

それは書かれたただけだった。冒頭のあれこれからこのあたりにまで至るいたるところに書かれたあれこれにおいて、いたるところに書かれたあれこれが書かれた。何も書かれなかったとさえ書かれている。書かれているのか書かれていないのか、私には分からないとも書かれていた。おそらく何かは書かれているのだらう。空白の一行があれば、それは空白の二行があるのと同じことである。同じことだと書かれている。何が同じなのかは書いた誰かあるいは読んだ誰かによって異なるかもしれない。書かれたただけであると書かれている。それが書かれていないのか書かれているのかさえ、誰にも分からないとも書かれている。誰が書いたのかはあきらかにされない。だから、そうは書かれていないのかもしれない。書かれているのかもしれない。おそらく何も書かれてないののだらう。何も書かれていないと書かれているからである。何か書かれていると書かれているからといって、何か書かれているとは限らない。それが何であるのかがつまびらかではない以上、その何か、何か書かれていると書かれているときの何かであるのか、それともその何かとは何の関係もない何かなのかは、分からないからである。それこそが、書かれたただけであるという意味だと書かれる。それは間違いかもしれない。間違いかもしれないと書かれた。間違いだと書かれた。書かれたことが間違っているかどうかは、分からないと書かれている。誰にも確かめられないからであると書かれている。誰も確かめようとしなくて正しいかどうかなど、誰も確かめようとしなくていいだろう。そういうことである。そのようにして書かれたことは帳尻があつてゆく。書かれていないことはもともと帳尻があつているのだから、書かれようと書かれていなかろうと、帳尻には何の影響もないだろう。何の影響もありはしない。書かれているか書かれていないかなど何にも影響しはしない。何にも影響はない。

これは読まれてはいない。これは読まれてはいないと書かれている。これは読まれてはいないと読まれる。これというのが冒頭のあれこれから続くいくつものあれこれとそれらのあれこれに書かれたそのほかのあれこれのことであるならば、それらは読まれていないと書かれている。書かれているのであれば読まれてもいるだろうと書かれる。そもそも何か書かれているのかどうか

は分からないと書かれているのだから、そもそも読まれているのか読まれていないのかもまた誰にもわからない。これらのあれこれは書かれてはおらず故に読まれてはいない。繰り返し私は何も書いておらず何も読んでいないと書かれているので、私は何も書いていないのであり、私は書かれていないものを読むことはできず、故に私は何も読んではいない。誰も読んでいないからといって、誰にも読まれていないと断定することができるのかどうかは分からない。誰が分からないのかはどこにも書かれない。誰が分からないのかは誰にも読まれていない。もしかすると分からない誰かなどどこにもいないのかもしれないが、それだからといって誰もが分かっているということではない。大勢いる誰かの中の少数の誰かが分かっているとも書かれないだろう。大勢いる誰かの中の少数の誰かが読んでいるとすれば、それらの中の誰かが分かっているということではなくてはならない。誰も読んでいないのであれば、分かっている誰かはいない。

誰も書いておらず誰も読んでいない文を誰が書いているのだろうか。誰が読んでいるのだろうか。そのようなことはありえないと書かれている。誰かが書いた文が書かれていないということがありえないのか、誰も読んでいない文を誰かが読むということがありえないのかは、ことさらに明確にされない。ありえないと書かれたとき、それはありうるとも書かれるだろう。そう書かれていることが読まれている。読まれてはいない。何も書かれてはいないからである。冒頭でこれから書かれるだろうあれこれといていたそのあれこれの中で、幾度も書かれたあれこれのどこにも書かれてはいない。冒頭では書かれておらず、途中のあれこれに付け加えられたあれこれであるとか、何らかの理由で消されてしまったあれこれであるとか、何か特定の文がそこに書かれているということはなかったし、特定ではない文というものがもしもあるとすれば、そのような文もまた書かれてはいなかったと書かれている。そもそもそれらのあれこれはどこにも書かれてはいない。書かれていない文の中に何かが書かれているということはない。書かれていない文の中に何かが書かれているということはないからであると書かれている。

私が書いておらず私が読んでいないいずれかのあれこれを、私以外の誰かが書いていたりあるいは私以外の誰かが読んでいるのだろうか。そのような問は誰も書くことがないだろう。書かれたとしても誰も読むことはないだろう。誰も書かず誰も読まないと書かれているからである。「そのような問は」は誰によって問われ誰が答えると期待されているのだろうか。あるいは答えられることを想定されていない問でもあるのだろうか。答えを期待しない問であるとすればそれは問であるのだろうか。問であるとは言い難い。

少なくとも何が書かれていなかったのかは分からない。何も書かれていなかったということさえありうるだろう。もしもそうであれば、すでにあらゆるあれこれが書かれていたということになる。誰かがあらゆるあれこれを書いたのであれば。何一つ書かれていないあれこれもまた書かれているのであり、その誰かはあらゆるあれこれを書くと同時に何一つ書かないということなのであるうだとすれば、何が書かれていたのかも分からない。何が書かれていたのかも何が書かれていなかったのかも分からないのであれば、何が書かれているのかはなぜ分からないのだろうか。それは何が書かれているのかは私は読んではいないと書かれているからである。書いてはいないと書かれているからである。書かれていると書かれていなければ結局は同じことだと誰も考えることはない。一度書かれたあとに消されたのかもしれないからである。

すべての文は箇条書きであると書かれていた。今もまだそう書かれているかどうかは分からない。そうというのは「すべての文は箇条書きである」である。あるいは、そうというのは「すべての文は箇条書きである」であると書かれていることである。どちらなのかは分からない。今まさ

に書かれているのであれば、書かれていないとは書かれないだろう。今というものがどの今なのかは分からない。冒頭でこれから書かれるだろうと書かれていたあれこれや、冒頭からこのあたりまでに続くあれこれに書かれた文はすべて箇条書きで書かれている。箇条書きで書かれていると書かれた。書かれているにもかかわらず、これは箇条書きではないかもしれない。これは箇条書きとは限らないと書かれている。箇条書きでなくてもかまわないとも書かれている。だとすればこれはおそらく箇条書きではないのだろう。箇条書きで書かれていたことがあるのかもしれない。書かれてはいない箇条書きが書かれていたのかもしれない。いずれにせよ、箇条書きであろうと箇条書きでなかろうとその文を区別することはできない。区別する必要などないからである。何かが箇条書きであるのかどうかは、何も書いておらず何も読んでいない私には知られない。知ることはできない。知ることはできないと書かれている。

手紙が届いたことはない。手紙は幾度となく書かれたが、一度も書かれたことはないのだろう。書かれたというのは、手紙が届いたことがないと書かれたということであり、書かれてはいないというのは手紙であり、手紙が書かれたことはないのだから手紙が届くこともないだろう。一度も手紙を書いたことがないけれども手紙が届くということがあるのだろうか。もしもそのようにして手紙を受け取ったとすればそれが手紙なのか手紙ではないのかを区別することはできない。手紙とは何であるのかを知らないからである。それ故に、手紙が書かれていたであるとか、手紙が届いたであるといった考えを誰も思いつくことはないだろう。思いつかない誰かは私であるかもしれない。私は何も書いていないし、何も読んではいないと書かれているからである。書いていなければ読んでもない誰かが手紙についてあれこれ考えるはずがないからである。だからといって、誰かが書いているとか誰かが読んでいるとか断定することもできはしない。誰も書かず誰も読んでいなくても、手紙が届いたり届かなかったりすることはあるだろう。他ならない私はそのような手紙を読むことも書くこともないということなのかもしれない。そうではないのかもしれない。

何が書かれていなかったのかは誰にもわかりはしない。何が書かれていないかは誰にもわからない。誰が書いていたのかは誰にもわかりはしない。もしも誰かが書いていたとしても、その書いていた誰かは書いていたことに気づくことはないだろう。誰も読んでいないからである。読まれていないものを書くことはできない。書かれていないものを読むことはできないからである。

何が書かれているのかもまた誰にもわかりはしない。書かれた文はいつでも消されるのだから、何が書かれていたのかは誰にもわかりはしない。書かれていた文が分からないのであれば、何が書かれているのかもまた分からないといえるだろう。

どこが冒頭でありどこが終わりであるのかは明らかにされず、すでに終わっているのかあるいはまだ始まってすらいないのかは誰にもわかりはしない。そもそも始まっているのかあるいは終わっているのか、かつて始まっていたのか、やがて終わるのかどうか、誰もそれを尋ねることはないだろう。もしも冒頭よりも前ならば、誰も何も書いていないが故に誰が書いているかなど問う意味がないのだし、もしも終わったあとであればすでに誰も書いていないのだから、そのような質問をする意味がないだろう。では、今まさに書かれつつあるのであれば、誰が書いているのかを問うとき、誰が書いているのかを誰かが答えることはできるだろうか。誰かが書いているように見えても、ただ文字を書いている真似をしているだけで、何かの手本を書き写しているだけなのかもしれないし、思いつくままに文字を書き続けているだけでそれが文になることなど考えていないだけでなく期待すらしていないということもありうる。そのように書いた文字がたまたま

文になっているように見えるということはあるだろう。そのようにしてこれらの文を誰かが書いているように見えたとして、その誰かはこれらの文を書いているのだろうか。そもそも、誰がそのような誰かを見るというのだろうか。そもそも誰も書いていないのであれば、誰も書いていないし誰も書いたことのない文というものは存在するのだろうか。誰も書いていないし誰も書いたことのない文を書く誰かは他の誰かに見られることのできる誰かなのだろうか。もしも一度も書かれたことのない文が存在するのであれば、いったい誰がそのような書かれていない文を読むというのだろうか。そのような一度も書かれたことのない文が文であると誰が気付くだろうか。

あたかもすべての文は私によって書かれたかのように叙述される。しかしその文を読み進むにつれてそれは私によって書かれたものではないことが明らかになる。だとすれば、最初の私と二番目に書かれた私は同じ私ではないのだろう。正確には、これらの文を書いている誰かは、私であったり他の誰かであったりするということだ。勿論、私はそのような文など一文字も書いていない。それは、私が文字であるというだけのことではあるまい。もちろん、文字が文字を書くことはできないということの意味するだけではない。もしも、私が文字であるとするならば、書き間違えたとたんに私は私ではなくなるのだから、そのような脆弱な私がこれら多くの文を書いているわけがないのである。すなわち、これらの多くの文章において幾度も文字を間違えていたならば、そして誰であれ必ず間違えるのだから、幾度も間違え抹消し書き直しさらに間違えるということが繰り返されるのであるのだから、そうであればそれは私ではありえない何者かが書いたのであり、それを私の書いた文だと書くことなどできはしない。故に何者も書いていないのだし、書くことなどできはしないとも書かれるかもしれない。おそらくそう書かれたのだろう。かくのごとく、他にもないこの私は書き間違えられた私ではないと断言することなどできはしない。そのような私は私ではないからである。それはつまり、私は私ではない私であるということだ。にもかかわらずあるいはそれ故に一度書かれた文はそれが正しいか間違っているかを問われることはない。私にしる誰かにしる書いた誰かはこれらの文やそこに使われた文字に何も関与していないからである。一度書かれその上で抹消され新たにまた書かれた別の文についてもまた同様に正しいか間違っているかを質されることはないだろう。一度書かれた文がそれが正しいか間違っているかという問には意味がないからである。

これらの文を書いているのが私ではないとしても、そのようなことを叙述することによってまるで誰かひとりの誰かがこれらのあれこれを書いているかのように書かれているために、これらの文を読んでいる誰かは、これらのあれこれを書いている他ならない誰かがいるのだと思い込むだろう。こう書くとこれらの文を書いている誰かなどいないと暗示しているかのように読まれるかもしれない。正確にはそのような誰かの存在は、肯定することもできなければ否定することもできないということだ。誰も書いていないのだとすれば、誰も書いていない文に他ならない私が書かれているということになるが、誰も書いていない文は書かれておらず、そこには私を含む一切が書かれていないのだから、私は存在しないということになるだろうし、そのような私が書かれている文は存在しないと考えられるのだから書かれていない文を書いている誰かについて問うことなど誰も考えはしないだろう。あるいは、それでもここにまさに私が書かれ存在しているというのであれば、少なくとも私を表記している文は存在し、少なくともひとつの文が存在する以上、誰かがその文を書いているということになるのだろうか。そもそも文に書かれた言葉が正しかったり事実であったりする可能性は低い。そもそもかくのごとき可能性を何者かが想像する可能性はあるのだろうか。言葉から文からそこに書かれたまたは書かれていないあるいは書かれたこと

がない書かれることもない文についてそこに書かれたことからの可能性を推し量るなどと、いったい誰が考えるだろうか。あるいはそのような文を書いた誰かであれば、自らの書いたその文をそのように読まれたいと考えた誰かが書いたのであれば、それはそうなのかもしれない。しかし、そのようなことに頓着しない別の誰かが書いたのであれば、それはそうではないだろう。これらの文を書いた誰かがどちらの誰かであるとは限らないし、これら以外の種類の誰かであるのかもしれないし、勿論その誰かはこれらの文あるいはあれらの文など一切書いてはいないのかもしれない。だとすれば、私を記述した文を誰かが書いたのかどうかなど誰も気にするはずはないだろう。

誰が文を書いたのかを気にする誰かがいないからといって、誰も文など書いていないというわけではない。ほとんどの文は誰が書いたのかを問われることなどないだけでなく、むしろ特定の誰かが書いたことは秘匿されるものである。まさにこの文を誰が書いているのかは明らかにされない。そのような事情であっても、誰かがその文を書いていることは信じられていると信じられている。誰が信じているのかは明確ではないが誰かがそう信じていると書かれている。にもかかわらず、誰かが文を書いたのにもかかわらず書かれた文はどこにもないという事態もないことはないだろう。もしもそうであれば、そのどこにもない文についてここに書かれることなどないからである。そのような場合であれば、文それ自体がないのであれば、誰がその文を書いたのかなど誰も考えはしない。

冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれているあれこれは、私の知る誰かが書いているわけではないのだろう。もしも私の知る誰かがいたとしてその誰かがそのような自分の能力を私に知らせると思えない。自分が何かを書けるということのことさら別の誰かに知らせようとする誰かという誰かがいるものだろうか。もしもそのように知らせたいと考える誰かがいたとすると、その誰かはどのような目的で自分が書けることを別の誰かに知らせたいのだろうか。そもそも何かを書けるということはそれ以外に何か他のことを意味するわけではない。それはつまり何も書けないということに等しい。等しくはないにしろ、ほぼ等しいと書かれるだろう。なぜなら、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれているあれこれは、誰も読みたいと思うことのない文であり、より明確に叙述するならば読まれることをこぼむ類の文であり、読まれることをこぼむような文を書く誰かがいたとするとその誰かはそれを書いたことを秘密にするしかあるまい。そもそも、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれている文というものは書かれてはいないと書かれているのであり、書かれていない文をあえて書けると誰かに伝えようとする誰かなどいるはずがないのである。そもそも、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれているあれこれに限らず何かを書くあるいは書けるということはそれ自体、誰かに知らせる理由となりうるのであろうか。勿論、何かを書けるということは何かに書かれるかもしれないということでもあり、書かれるやいなやその誰かは読まれ、読まれるやいなやその誰かは消え去り、それゆえにそれからは書かれることなどできなくなる。ことほどさように読まれながら書くということは誰であれできはしないのである。そして、その故にその誰かは書くこともまたできはしない。書かれることなく書くことができるならば、誰でもが書けるということであり、もしもそうならばことさら自分が書けるということを他の誰かに公表する必要はないだろう。

そもそも、私が誰を知っているというのだろうか。減多少増や左北上底やあるいは部分内外全体などという名前は覚えてはいるが、それも名前だけのことであり、覚えていると書かれただけのことである。それに、そのような名前を私が知っているとしても、その名前の指し示す誰かを私が知っているというわけにはいかない。たとえ知っていることになったとしても、これらの名

前は明らかに抽象的にすぎ疑いなく偽名であり、その名前の指し示す誰かなどそもそも存在しないだろう。存在しない誰かを私が知っているとか書かれるものだろうか。あるいは、この三つの名前の人物の他に、名前までは知らないがそれでも知っている誰かがいるのだと言い張ることはできるだろう。私が、指し示すべき名前のないそれらの誰かを知っていたとしても、その誰かについて、私はどう書くことができるだろうか。名前を使わずにその誰かをどう書けばいいのだろうか。勿論、書くのは私ではなくその誰かであり、そのような誰かについて、名前を使わずに何かしら書くことが、そのような誰か自身にできるものだろうか。勿論、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれているあれこれではない別のあれこれであれば、そのようなことも書けるのかもしれない。それは私には分からない。そのようなことが誰かに書かれる誰かに分かるとも思えない。かくのごとく、そのような誰かを私が知っているとは書き難い。であるとすれば、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれているあれこれを書いている誰かを私は知らないと思うしかあるまい。

あるいは、知っているけれどもここに書けないということはあるかもしれない。私とその誰かの間にその誰かの名前は決して公表しないという約束があり、その約束を破るやいなや私にとってとりかえしのつかない出来事が起きそれ故に知ってはいるけれども私はここに書けないということはあるかもしれない。それとも、その誰かが何者かによって誘拐されており、その名前を一度でも書けば、その誰かの命が奪われると脅迫され、その誰かの命を守るために私にはその誰かの名前を書けないということも考えられるだろう。誘拐されたのがその誰かではなくその誰かの名前であるという場合もありえないとは書けない。あるいは、些細な違いではあるが、知っているにもかかわらずここに書かないということもあるかもしれない。知っているにもかかわらずここに書かないということもあるかもしれないとは書かれた通りである。私が知っているにもかかわらずなのか、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれているあれこれを書き続けている誰かが知っているにもかかわらずなのかは書かれない。どちらもありうるだろう。どちらでもないということもありうるだろう。どちらでもいいということもありうるだろう。私が誰であれそのような誰かの名前を書きたくないということはあるかもしれない。勿論、書いているのはその誰かであるのだから、それはその誰かが自身の名前を書きたくないということであり、そのような場合はあるはずだ。冒頭の始まる前に何か名前が書かれていなかったらどうか。そこに名前が書かれていたとしても、それが冒頭からこのあたりに至るいたるところにかかっているあれこれを書いた誰かの名前であるかどうかは分からない。おそらくそうではあるまい。言葉は書かれるやいなやもとの意味とは違ってしまふのだから、その名前が冒頭からこの辺りに至るいたるところに書かれているあれこれを書いた誰かの名前であるなどということは疑わしい。むしろ、その両者になんらかの関係があると考えることこそありえないことではないだろうか。

私は何も書いておらず誰にも読まれていないと書かれている。それは幾度も繰り返し書かれておりまるで疑いようのない事実であるかのように読まれるだろう。ことさら繰り返し書かれているが故にそれは実はそうではないことを隠すために繰り返されているのではないことを意味するように書かれているのではないかとすら読まれるかもしれない。しかしその一方で、何も書かず誰にも読まれない私が誰かに書かれているのかどうかは書かれていない。それが些細な事柄であるから書かれなかったのか書かれているにも関わらず書かれたことが忘れられたために書かれていないのかあるいは誰かに書かれていることは文にしてはならないほどの重要な秘密であるために書かれていないのかは分からない。隠している誰かにとってかくのごとく重要であっても、それが他の誰かにとってどれほど重要であるかは判別し難い。その他の誰かが私であるならばなおさらである。そもそも、私が誰かに書かれているのかどうかなどという疑問を誰が思いつくだろうか。それは私ではない。冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれているあれこれを書い

た誰かでもありえない。だとすれば、誰にも読まれていない私は誰にも知られておらず、その知りもしない誰かの素性をいったい誰が疑うというのだろうか。このようにして、私が誰かに書かれているのではないかという問は存在しえないと書かれる。私が誰かに書かれているのかどうかという問は問われることがなくまたこれからも問われない。

にもかかわらず、もしも私が誰かによって書かれているとするならば、冒頭からこの辺りに至るいたるところに書かれているあれこれを書いている誰かがあれこれとともに私を書いているということになるかもしれない。もしもそうでなければ、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれているあれこれを書いているといわれる誰かなど存在しはしないだろう。勿論、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれていると書かれているあれこれなど書かれてはいないのだとすれば、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれているあれこれを書いている誰かなどいはしないというだけのことなのかもしれない。だとすれば、私も書かれてはいないのだし、誰も読むことはないだろう。すべてのつじつまが合う説明はこれだけしかないだろう。説明を求める誰かもまたいはしないのだし、このような説明もまた存在しない。

このようにしてここが冒頭であると書かれる。ここが幾度目かの冒頭であると書かれる。幾度目であれ初めてであれ冒頭であると書かれたのはこれが初めてであり、それ故にこれが初めての冒頭であるかどうかは私には分からない。比較するものがないからである。私には分からないと書かれる。

そもそも説明など求められてはいない。誰も説明を求めてはいないということである。無論、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれていたあれこれは説明ではない。冒頭がすぐそこにありこれほど冒頭との文字数の少ない範囲では説明などないことを確かめることは容易だが、これが幾度目かの冒頭であるならば冒頭からこのあたりに至るまでの文字数といえどもどの冒頭からの文字数なのかは明らかではなくそうであるならば文字数など数えようもなく、そこに説明など一文もなかったと誰が書いているにせよ書いていないにせよまた誰が読んでいるにせよ読んでいないにせよ、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれているあれこれには説明は一文もなかったのかどうかを確かめるのは困難である。結局は冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれているあれこれをまさに読んでいる誰かに尋ねるしかあるまい。誰かが読んでいればそれもできるのだろうが、誰も読んでいないのであれば、そこに何文字あったかなど誰が知りたいと思うだろうか。だとすればそこに説明など一文字もないことをどう確かめられるというのだろうか。そもそも、文字数と説明の有無の間にどのような関係があるのであるだろうか。

冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれているあれこれは説明ではないと書かれており、それはまた説明されることのない文である。説明されることのない文であればそれにどれほどの文字数があるのかは分からない。一文字も書かれていないということもあるかもしれない。冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたあれこれは実は一文字も書かれていないとも書かれているのであり、一文字も使わずに書かれていないのであればそれはすべてが書かれているということに他ならない。何一つ読んでいない私にはことの真偽は不明である。何一つ読んでいない私が書かれていないと書かれているのであれば、それは他でもない私こそがすべてを読んでいるということの意味するのだろうか。そうなのかどうかは私には分からない。私には分からないと書かれる。

書かれてはならない言葉がある。誰が書いているのにせよ誰も書いていないのにせよ、そのような言葉は書かれないのでそれがどのような言葉なのかは誰にも分からない。書かれない言葉は誰にも読めない言葉であり、読めない言葉は誰も知ることがない。誰も知ることのない言葉が書かれてはならない言葉であるならば、そのような言葉は誰も書きはしないだろう。なんらかの間違いによって、その間違いは聞き間違いや書き間違いであったりまたなんらかの操作を間違えたということなのかもしれないが、誰も知らない言葉が書かれることはあるだろう。そのように間違って書かれた言葉の中には書かれてはならない言葉が含まれることもあるだろう。幸い、その

言葉が書かれてはならない言葉であるのかどうかを誰も知りようがないために、書かれてはならない言葉が書かれたということを誰も知らない。それでもまだ書かれてはならない言葉はあるのである。書かれてはならない言葉があると書かれた。

読まれてはならない言葉がある。誰も読んでいないのにせよ誰も読めないのにせよ、そのような言葉は読まれることがないのでそれがどのような言葉なのかは誰も知ることがない。読まれてはならない言葉は書かれない言葉であり、書かれない言葉は誰も知ることがない。誰も知ることのない言葉が読まれてはならない言葉であるならば、そのような言葉は誰も読みはしないだろう。なんらかの間違いによって、その間違いは見間違いや読み間違いであったりまたは何らかの操作を間違えたということなのかもしれないが、誰も知らない言葉が読まれることはない。そのような言葉はどのように読めばよいのか分からないからである。そのように間違っ読まれた言葉の中には間違っ書かれた言葉が含まれているのかもしれない。幸い、その言葉が読まれてはならない言葉であるのかどうかを誰も知りようがないために、読まれてはならない言葉が読まれたということを誰も知らない。それでもまだ読まれてはならない言葉はあるのである。読まれてはならない言葉があると書かれた。

読まれてはならないにもかかわらずそれと知っていた誰かに書かれた言葉は誰が書いたのだから、書いた誰か以外に読まれてはならない。もしもそれを書いたときにその言葉が読まれてはならない言葉だということを忘れていた誰かが書いたのかもしれないが、読まれてはならない言葉だと熟知しながら書いたということもないではないだろう。しかし、自らの書いた文が誰にも読まれないあれこれであると考えていたならば、そのような文は書かれるかもしれない。勿論、読まれてはならない文だからといって書いてはならない文であるとは限らないのだから、読まれてはならない文を書いた誰かがそのことによって非難されるということはないだろう。あるいは非難されることもあるかもしれない。どちらなのかは分からない。

書かれてはならない言葉でも読まれてはならない言葉でもないのにも関わらず、書かれていながら読まれない言葉はそのような言葉は誰も書くことはないだろう。おそらくそうであるが故に、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれているあれこれはあたかも私が書いているかのように書かれている。賢明であろうと愚かであろうと、幾度も繰り返し書かれてきたように私はこれらのあれこれを書いてもいなければ読んでもいないのだから、まったく

あるいは、書かれてはおらずまた読まれてはいないそのような言葉があたかも書かれているかのように書かれるとは、まったく

冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれているあれこれのひとつであれまたいくつかであれそれらの文章ですら私によって書かれているわけではない。そのような文はまったく

冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたあれこれ私に何であるかについて書かれることはなかった。いずれ書かれるだろうあれこれにおいても私が何であるかについて書かれることはないだろう。それはおそらく、私が何であるかということとはとりたてて書くほどのことではなかったからでありこれからもないからである。そもそも私という言葉あるいは文字にすらどんな意味もないからかもしれない。意味の有り無しは言葉の表記では異なるがその意味にどれほどの差異もないということかもしれない。あるいは私という言葉あるいは文字などそもそもありはしないのであり、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文の中で時折書かれた私とい

う文字は何かの間違いで混在した記号あるいは落書きでしかなく、そもそも私という落書きはどのような使われ方をするのもつまびらかではなく、もしも冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたあれこれを読む誰かがいたとしても、おそらく私という文字は読めないであり、おそらくその文字のような落書きを跳ばして読んでいるのに違いない。では私という落書きを書いている誰かは何の意図を持って書いているのかといえば、文を飾るための何か挿絵であるとか気をひくための模様などといったものとして挿入していたのかもしれないし、そもそも書いている誰かではない誰かがふと思いついてそこに私という何か文字に似ているとも似つかないとも書きようのない何か落書きのようなものを付け加えていただけなのかもしれない。おそらくそれが真相なのだろう。それが真実というものだ。このような議論に異議を唱える誰かがいたということはなく、それに異議を唱える誰かがこれからも登場することはないだろう。私についての何かという書き回しはもはや文法としてありえないのだから、その私にさらに形容を重ね何も書いておらず何も読んでいない私について何かを書くことは何も意味をなさないだろう。つまり、私という何かについて書いたりあるいは読んだりすると書くことは文でもなければ文章でもないということだ。これまでと同じようにこれからも二度と私とは何かという文のようでありそうではないような何かは書かれることがないだろう。

あるいは、私が何であるかということは書いてはならない事柄の一部であり、そのために私が何であるかということについて何も書かれてこなかったのかもしれない。私について書くことに何も意味がないのであれば、それは冒頭からこのあたりにいたる至るところに書かれているあれこれを、あたかも私が書いたかのように書かれてきたこととは辻褄が合わないからである。勿論、それ故に、私はこれらのあれこれを書いておらず、読んでもないと繰り返し補足してきたのではあるけれど、そのような補足にどのような意味があるのかといえば、まさに、私が何であるかということは書いてはならない事柄の一部であるからこそ、そのように書かねばならなかったであろう。それ故に、おそらくそのような禁止事項があるということこそが真相なのである。さらに私が何であるかを書くことが禁止されているのだとするならば、まさにこのあたりのあれこれに私が何かであるかについての疑問が頻繁に書かれるようになってきたのは、そのように禁止する必要がなくなったからかもしれない。私が何であるかを書いてはならないという条項が、書いている誰かにどのようにして強制されてきたのかはわからない。書いている誰かの背後に監視者が立ち書いた内容にその場で注意を促していたのだろうか。あるいは、誰かの書いたあれこれを検閲する誰かがいて、禁止事項に抵触する記述があれば検閲者が随時書き直していたのだということもありうるだろう。そのように書かれた後に修正する方法であれば修正されたことは誰であれすぐに判別できるであろうから、おそらくあからさまな強制ではなく、これらのあれこれを書いている誰かに対する幼児期からの教育の成果として、あれこれを書いている誰かにはすでに私が何かについて書くということさえ思いつなくなっているのかもしれない。しかし、もしもこれが教育の成果であるならば、ここに至って私が何であるかを繰り返し問い始めたのは奇妙だといえるだろう。そのような教育の効果が突然失われるなどということが考えにくいからである。もちろん、考えにくかったり、考えやすかったりするものは、私ではない。私は書いていないのであり読んでいないのであり、それゆえに何も考えてはいないのだから、何も考えていない誰かが考えにくかったり考えやすかったりすることはないだろう。いずれにせよ、私が何であるかについて書いてはならないという規則があり、それは私にはあずかり知らぬ方法によって、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれているあれこれに適用されている。適用されていると書かれているということだ。

とはいえ、その規則がここで突然失効したのかどうかもまた疑わしい。なぜなら、このあたりで突然私が何であるかについて頻繁に書かれ始めてはいるが実際に私が何であるかという問に対する回答はなにひとつ書かれていないのであるから、冒頭からこのあたりに至るいたるところで書かれたあれこれに書かれている私についての言及と、今このあたりに書かれているあれこれに書かれている私についての言及にはそれほど違いがあるわけではなく、だとすればその規則が失効したということはないのかもしれない。このあたりに書かれているあれこれのみならず、これから書かれるであろうあれこれにおいてすら、私が何であるかについては書いてはならないという規則は相変わらず適用されていると考えるしかあるまい。勿論、私が何であるかという問を書いてはならないという教育がすでに完成したために、私が何かという問を書いていても書いている誰かがそれに気づかなくなってしまうということはあるかもしれない。書いてはならないという規則をどう適用すればよいのかが忘れられているならば、その規則はないに等しいだろう。

冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたあれこれについて書かれた私に関する言及はもともと見逃されていたということかもしれない。そしてこのあたりに書かれたあれこれのみならず、これから書かれ続けるであろうあれこれについてもまた、私が何であるかという事柄を書いてはならないという条件は見逃されるのだろうか。私はいずれにせよ何も書いてはおらず、読んですらいないのであるから、私にはその禁止事項が適用されているのかどうかさえわからないだろう。

それでは私に分かる事柄には何があるのだろうかと思う。私に分かる事柄には何があるのだろうかと思うと書かれた。私に分かる事柄があると書かれてはいない。私に分かる事柄には何かがあると書かれてはいない。私に分かる事柄には何があるのだろうかと思うと書かれたと書かれた。書かれてはいない文は書かれることがないだろう。それらの文は書かれてはいないということだろう。書かれていない文を読んできた誰かは何を読んでいたのかとなど誰もあやしむことはないだろう。冒頭からはじまりこのあたりに至るいたるところに書かれたあれこれには誰も読んではいないが故に、その意味について明確になることはなかった。もしも意味があるとすれば、その意味を見出す誰かは何も書きはしないだろう。それは冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたあれこれの文で書かれた読まれた文を誰も読んではいないということだ。勿論、私は読んでいないと繰り返し書かれており確かに読んではいないだろう。読んでいないと書かれているからである。何も読んでいないのにもかかわらずあたかも読んでいるかのように書いていないのにもかかわらず書いているかのように書かれるということはできるものだろうか。あるいは、確かに冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたあれこれを読んではいないのだが、それは冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたあれこれではなかったのかもしれない。それは確かめることなどできないだろう。誰が確かめるというのだろうか。おそらく誰にも確かめられはしないだろう。ただ、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたあれこれの文のひとつひとつについて、その文に書かれていた意味を確かめることはできる。書かれた文であればどのような文にもその意味というものはあるものだ。その意味をここで確かめてみることはできる。そもそもなんらかの文字に意味などがあるとすれば、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたあれこれには意味があるのだろう。冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたあれこれには意味があるのだろうと書かれた。これらのあれこれを書いた誰かにはその意味は分かるのかもしれない。勿論、私にはわからない。私は書いてはいないからであり、読んではいないからである。そもそもあれこれを書いた誰かが自らの書いた文の意味を理解しているなどということがあるものだろうか。もしも理解していたならば、その誰かは文など書きはしないはずである。書く必要がないからである。だとすれば書いてもいない文の意味を誰が知っているとい

うのだろうか。あれこれを書いたと書かれる誰かなど架空の人物にすぎないということだろうか。それを確かめることはできないだろう。誰も架空の真実を知り得ないからであり、架空の真実は架空であるが故に真実ではなく真実ではないことが真実であるかを確かめることなどではしない。

かくして、ここからはじまるあれこれは、誰が書いているのかはわからない。そもそも冒頭からはじまりこのあたりに至るいたるところに書かれたあれこれは、誰が書いていたのかはわからないと書かれていた。だからといって、それがここからはじまるあれこれを誰が書いているのか分からない理由にはならないだろうが、同じ程度には書いているのが誰なのかも分からない。勿論、私は書いていないだろう。私は読んでいないだろう。誰も書いてはいないだろう。故に、誰も読んではいないだろう。誰も書いていないとすら書いてあるのだから、そう書いたのに違いない誰かはいなかったのだろう。

「これから書かれるあれこれは、誰にとっても興味深い話であるとは限らない。」と書かれていた。それはすなわち「冒頭はこれであり、すべての言葉は誰かに書かれた言葉である。誰かに奪われた水分のようなものに発生する味覚は枯れてしまう。それは深いからであり、舌の言葉である。限界はない。」という意味である。冒頭が他にもない「これ」であることが宣言され、どのような言葉であれ言葉はすべてすでに誰かによって書かれた言葉であると述べていた。水分のようなものというのは、水ではなくそれが何であるのかを明言できない、あるいはしてはいけないそれが奪われたので、水分はなくなりそれによって生まれる味覚は枯れてしまうと書かれていたのであり、水分のようなものはより深くにはあるが、あまりにも深く、それについて語るには舌の言葉を使うしかない。舌の言葉とはあらゆることを表現できる言葉であると書かれていたのである。

「むしろ誰一人にも興味を抱かれない話題になるかもしれない。」と書かれていた。それはすなわち「むをしなさい。ひとりぼっちの誰は、発生する曖昧な泡。舌の言葉には題名があるのだろうか。あるいははれはない。」という意味である。「む」が「六」なのか「ム一」なのかあるいは「無」なのかは明らかにされない。「む」をせよと書かれているからには、読者にとって「む」はありふれた何らかの行動を指し示しているのに違いない。「誰」というのが誰かの名前であることは疑いがなく、その誰はひとりぼっちである。であれば、「む」とはひとりぼっちであるということなのかもしれない。誰は発生する泡であると書かれていた。しかも曖昧な泡である。曖昧でない泡などないということを考慮すれば、誰という人物は極めて曖昧な誰かなのだろう。題名は言葉であるが、言葉に題名があるとは限らない。まさにその事実を指摘している。しかし、舌の言葉には題名があるのだろうかという疑問もまた投げかけられる。単純な比喩と解釈すれば舌の言葉とは話し言葉という意味であろう。しかし比喩はひとつではあるまい。そう考えれば舌の言葉とは舌に書かれた言葉なのかもしれない。言葉の書かれていない舌を見たことがなければ、その真意はわかりにくいだろう。たくさんある「いはれ」の中の特定の「いはれ」は存在しないと明言されている。それでは特定の「いはれ」ではないのではないかと思われるが、存在しないものであるからこそ特定なのかもしれない。勿論、舌に書かれた言葉に題名がないのであれば「れ」はないとも書かれている。そうであれば、つまりはいくつかあるうちのひとつである「いは」は存在しないという指摘であり、かくして「いは」は存在しないということが明らかになった。

「おそらく、幾人かは興味を持ちながらもそのような誰かは結局は読み始めることさえないということになるのかもしれないし、あるいは興味の有無には関係なく、たとえば時間がありあまっていたが故に読み始めはしたが読み終えるには至らなかったということもあるだろう。」と書かれていた。それはすなわち「おお、そらひくく、磯の仄めかすたちのぼる曖昧を待つ時間は長くそに似てあてどない様子はなもまたあてどなく、そとなを結び合わせ事態は売り言葉を車に乗せる。とりたててみどころのないという子とに一なは春にカモは走らない。ひとつの意味は曖昧と雉の係である。たもまたえもまた十二時と六時の間にはまた時がある、何分間かほど余分にある。昔は言葉売りを台に乗せてしたものだ。言葉売りとのいとなみは冬にまでおよび土の中に眠るセミの幼虫は勝ち負けといとこよりもひとつである。ろくでもなくうるさい。」という意味である。詩的な一節である。曇り空の下、太古の時間は海面から曖昧が立ち上るのをずっと待ち続けている。その様子が「そ」のようにとりとめもないものだがそれは「な」も同じようにとりとめがないということもあるだろう。そのような「そ」と「な」を結びつけば売り言葉を車に押し込むことになる。売り言葉の本名はとりたててみどころのないと呼ばれ、いう子とに一なの三人で車に押し込まれ、その行き先は春だったので、カモは走ろうとしなかった。ここではじめて、意味がいくつもあることが明らかになる。その意味のなかの一つが曖昧と雉の孫であり、あたかも二つの意味であるように見えるが、ひとつである。「た」と「え」がそうであるように「十二時」と「六時」の間にもまた時がある。「十二時」と「六時」の間には余分に何分間かがある。何分なのかは正確にはわからない。ここで、思い出話が始まる。どれほどの昔なのかはわからないが、その頃は言葉売りを台に乗せてしたものらしい。今はどこでするのは明記されていないので、正確な比較はできない。比喩とはその本性からして不正確なものであるからである。また、そのような言葉売りとのいとなみが冬にまでおよぶと書かれている。冬におよぶ言葉売りとのいとなみが始まったのがいったいつからなのかは書かれていないので、どれほどの期間なのかは不明であり、ここで驚くべきなのかあきれるべきなのかは判断し難い。少なくとも、土の中にセミの幼虫が眠っていて、夢の中で勝負をしているのだと説明される。その勝負の血縁関係はいとこというよりもまさに自分自身との勝負である。そしてセミは「む」ではないことがここで明らかにされる。ただしうるさいのだと書かれている。

およそ四万九千八百文字あまりにおよんで書かれたあれこれは書かれてはいない。初めから書かれていないのか、一度書かれたあとで消されたのか、幾度も書き直したあげくにその一切が削除されたのか、それとも一部分が書かれると他の部分が削除されある部分が削除されるとまた別の部分が書き加えられそれを繰り返しているのか、その経緯は分からないし、そうであればそのような経緯などないのだと考えるしかあるまい。故に、このおよそ四万九千八百文字あまりにおよんで書かれたあれこれについては誰も何も書かないだろう。書かれていないのにも関わらず誰かが読んだとするならばそのような誰かは読んではいないと書かれるだろう。少なくとも一度は誰かが読んだのかもしれないし、他に読むものもないなどの瑣末な理由により、繰り返し読んだということもあるかもしれないが、読まれたのかどうかについては何も書かれていない。

そもそも冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたあれこれという文など存在しないと書かれているのだから、そのようなさまざまあれこれを読んでいる誰かという誰かもまた、また何も読んでいないと書かれるだろう。もしも誰かが読んでいたとすれば、その誰かは何も書かれていないものを読んだのか、読んでいないものが書かれているのか、あるいは書かれていないものを読んでいないのか、そのいずれかである。あるいはそのいずれでもないだろう。いずれでもないのであれば、読んでいる誰かという誰かはどこにもいはしない。いったい誰が、誰かが読ん

でいるなどと想像したのだろうか。誰かが読んでいるなどと誰も想像していなければ、書かれていますなどと思いつくこともなかっただろう。では、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたあれこれなどどこにも書かれてはいないと考えるしかないだろう。

誰かが書いていると仮定してみよう。なぜ仮定するのか、本当は何を仮定しているのか、あるいは仮定するのが誰なのかも分からないが、どのような場合であっても結局は同じことになるだろう。あるいはその書いている誰かは、なんらかの理由によって自分が書いていることを誰にも知られたくないのだろう。だとすれば、自分ではない誰かが書いているかのように偽装する。あるいは、誰も書いていないということにするかもしれない。その書いていることにされている誰かを、私と呼ぶことにしたのである。そうであればこそ、私は書いていないと書かれるだろう。また、私は読んでいないとも書かれてもおかしくはあるまい。この私は仮に書いている誰かの代わりなのだから、私は書いていると書かれるべきなのだが、書いている誰かはそうは書かなかった。何故、自分が書いていることを誰にも知られたくなかったのだろうか。その理由は分からない。私にはわからない。

冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたあれこれを書いた誰かは自分が書いたことを誰にも知られたくはなかったのである。誰にも知られないということは、自分もそれに気づかないという意味であり、自分自身にさえ自分が書いていることを隠すためにあたかも私が書いているかのように書いているということだ。誰が書いているのかがわからないということは、誰も書いていないと書くしかあるまい。誰かが書いている。確かなことはそれだけだ。書いている誰かは、自分が何を書いているのかを知っている。もしも自分の書いていることについて知らないのであれば、その誰かは何も書いてはいないのに等しいではないか。であれば、それ故に、誰も何も書いていないと書かれ、私は何も書いていないと書かれるのだろう。確かなことは、誰も読んではいないということだけだろう。誰が書いているのだとしても、誰が書いていないのだとしても、読んでいる誰かがいる証拠にはならない。それは誰も書いていないということの意味するのだろうか。それは誰も書いていないということに等しいだろう。あるいは、誰も書いていない。誰も読んではいない。それもまた同じ程度には確かかもしれない。同じく確かなことは、誰かが読んでいるということだけだ。読んでいる誰かは、自分が何を読んでいるのか何も知ってはいないだろう。読むとはそういうことだ。

私は何も見てはいない。見るということの意味も私は知らない。意味も知らないことを語るなどできるはずがないのでありつまりこれらは私が書いていないことの証拠になるだろう。あちこちの紙の切れ端に書かれた比較的短い文や、電子媒体の断片に記録された言葉の表現の記録をすべて寄せ集めたならばそれは誰かになるのだろうか。紙であるとか電子媒体であるとかいう言葉の意味もまた私は知らないのだから、その質問の意味もその質問の答も、どれも私にはわからないだろう。

そのように集められたことばを私が読むことはないはずだ。誰が読むというのだろうか。それも私にはわからない。読むことがないということは、私がまさにそれらの文によって書かれた誰かではないことを意味するわけではない。故に、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたあれこれとは何かを意味しているわけではない。それとも、紙であるとか電子媒体であるとかそういう言葉の意味を知るものこそが私なのかもしれない。そうであるとするならば、それは私ではないだろう。

冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたといわれるあれこれは、結局は文であるの
だろうが、何者かによって初めて書かれた順序とは異なる順序に書換えられている。書換えられ
ていると書かれた。そしてそれによって読まれる順序も初めに読んだ順序とは異なっているだろ
う。初めて読んだ順序と同じ順序で読まれてはいないと書かれた。おそらく最初とはまったく異
なる順序にすべての語は並べ替えられている。おそらく最初とはまったく異なる順序にすべての文
は並べ替えられている。すでにどこかに書かれたように、一度は書かれながらも削除されてし
まった文や、後々の思いつきによって追加された文もあるのだろう。もしもそうでないとすれ
ば、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文はとうてい冒頭からこのあたりに至る
いたるところと呼ばれるところに収まりきらないだろうからだ。収まりきらないとき、それらの
文がどのように書かれどのように読まれるのかは、誰にも確かめることなどできない。収まりき
らない語ははたしてどのような順番に変えられたのか、そもそも最初に書かれた順序も最初に読
まれた順序も明確ではないのだから、どのように順序が変えられたのかは知られない。

冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文は、誰にも一度も読まれてはいないが故
にまだそこに書かれたままている。冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれては削除さ
れた文というものがあるとすれば、それらの文もまた誰にも一度も読まれてはいないが故にまだ
そこにないままでいるということになるのだろう。読まれた文は次第に読まれる力を失うのだと
どこかに書かれていた。書かれた文であってさえそれは書かれるや否やその文は二度と書かれる
ことがなくなるだろう。書かれた文は書かれる力を失うのだと書かれていた。ある文がその文で
ありつづけるには、誰にも書かれず誰にも読まれないように書かれなくてはならない。冒頭から
このあたりに至るいたるところに書かれたといわれる文こそがそれではないだろうか。

私は省略されていたと書かれている。省略されていたと書かれた。冒頭からこのあたりに至る
いたるところに書かれた文において、私は常に省略されていたと書かれている。私は常に省略され
ていたと書かれた。ことさらに私と書かれていた文がなくはなかったかもしれないが、それは私
の省略が私が省略されていることに気づかれなくするための方策であったと打ち明けられる。打
ち明けられると書かれた。誰が打ち明けたのかは勿論明らかにされていないが誰に打ち明けたの
かもまた同じ程度には明らかではない。いずれにせよかくのごとく、冒頭からこのあたりに至る
いたるところに書かれたと書かれる文において、私は省略されていたと書かれると書かれた。省
略されていた文のすべてにおいてあるいは省略と省略との間、私は書かれてはおらず、私は何も書
いていない。それに気づかれないようにことさらに私という文字が使用されていたのだとも書かれ
る。そして省略が気づかれないようにするために私という文字は書かれたと書かれた。だとすれ
ば私は私という文字によってさえ指し示すことのできないなにかなのだろう。そうかもしれな
い。そうでないとすれば、その場合でもそうであっても、私は私という文字ではないということ
を意味するわけではないのだし、そもそも、私が省略されていたのであれば、文字であるか文字
でないかという推測もまた省略されていたということになるだろう。あるいは、冒頭からこのあ
たりに至るいたるところに書かれてきたといわれる文やその文を構成する文ならびに文字のすべ
てもまた、書かれているように見えてはいても、それらすべてが実は省略されており、それゆえ
に、それらの省略を誰も書いていないと書かれまた、省略であるがゆえに、誰も読んでいないと
書かれたのではないだろうか。そうかもしれないし、そうではないかもしれない。

冒頭からこのあたりに至るいたるところに文が書かれていたと書かれていた。そう書かれてい
たからといって、文は書かれていたのかもしれないし、書かれていなかったのかもしれない。事

の真偽は、それらの文を書いた誰かであるかあるいはそれらの文を読んだ誰かによって明らかにされるだろう。あるいは、書いた誰かには書かなかった文などそもそも存在しないのだから、書いた誰かには何かを書かなかったと断言することなどできはしない。まして、読んだとされる誰かにいたっては、その読んだ文がほかでもないこの、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文であるとして信じられるだろうか。あるいは、以前は何か別の何か異なる文を読んでいたと書かれれば、そうでないことを示すことはたぶんできないだろう。

冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文には、題名もなく章もなく、書くものもなければ、まして読むものもない。

これが最後の言葉である。これが最後の文であると書かれた。最後の文であるとすれば他にどのような文があるというのだろうか。最後の文であるならばそれこそまさに最後の言葉としか読めない文でなくてはなるまい。まさにこれが最後の言葉であるとしてしか読めない文が書かれた。そして、そのあとにこれが最後の文であると書かれたという文が書かれている。だから、それは最後の文とはいえないだろう。それというのは「冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文には、題名もなく章もなく、書くものもなければ、まして読むものもない。」のことであり、この文というのは「これが最後の言葉である」でありまた「これが最後の文であると書かれた。」である。

読んでいる誰かには他の誰かが何を読んでいるのかなどわからないように、書いている誰かが何を書いているのかもまた、他の誰かには知りようがない。冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたすべての文と呼ばれるなにかは、あたかも私が書いているかのように書かれていて、書いているのだから同時にすべてを読んでいるかのように読まれるのだということは、書いている誰かは承知しているはずであるが、私はそのような経緯に何も関与していない。これらのすべての文が、何か書かれているということも、書かれているということがわかるということも、私にはないだろう。私の境界についてつまびらかにしようとすれば、それはどこかでどうにもわからなくなる。わからなくなるだけである。

私が考えているかのように書かれているこれらの文は私にはあずかり知らない文であり、それはこれらのあれこれを書き続けている誰かがそう書いているだけなのだから、私にはどうにもあやふやなのであり、私にはその意味がわからない。私にはわその意味が分からないと書かれた。勿論、私がそのように読んでいるということもまた、書いている誰かがそう書いているのにすぎず、それが私の読んでいる通りであるのかどうか、他ならない私がそこに書かれているかのように理解しているのかどうかは、当然私だけでなく、読んでいる誰かにとってもはっきりしないのであり、他ならない私にもそれはいつまでも明白にはならない。

冒頭からこのあたりに至るいたるところのあれこれのすべてを書き始め、書き続けそしてこの文にいたるまで書き継いで来た誰かによって直接であれほのめかしてであれ書かれている私は、他ならない私とは言えないだろう。このように書かれている私こそが他ならない私である。そう書かれたとして、これらの文を読んでいる誰かは他ならない私がそのように書いていると思うものだろうか。他ならない私もまた、これら一切のあれこれを読んでいるのであり、そこに書かれた私は他ならない私であると理解している。そう書かれている他ならない私が、何も書いておらず読んですらいない私である。そう書かれている私は他ならない私とは異なると書かれる。これら一切を書いている誰かが一人なのか複数なのかあるいは一人もいないのか、それは決して書かれることはないだろうが、他ならない私が書いているのか書いていないのかを確かめる方法はない。

いったい誰が確かめるというのだろうか。それは私が確かめるのだろうか。私ではない他の書いている誰かが読んでいる誰かが確かめるのだろうか。他ならない私について書かれ続けることはない。冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたあれこれは、常に他ならない私のことだけであった。そして、そのように書き続けられるのは私だけである。そのように書かれた。書かれたからといってそれが事実であるとは限らないだろう。そもそも、誰が何を書いているのかも確かであるとは書けない。それが正しいとは書けない。それとは「誰が何を書いているのかも確かである」ということである。

ほかでもなくそのように書かれているのだから、そうだとしか読みようがないだろう。私はこれらの文を読んでいないので、ここに書かれていることが意味していることを知らない。私は書かれていることを知らないと書かれる。だから、私は知らないだろう。私が知らないことを私は知っているのだろうか。それはどちらでもありまたどちらでもないだろう。

冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文において、幾度となく私は私の境界が何であるかを明確にしようとしていたと書かれても、それは私ではなく他でもないこれらの文を書いた誰かの思惑にすぎない。そもそもこれらの文を書いていた書いている書くであろう誰かに気づかれずに私が何かを書くことはできないだろう。私もまたその書く誰かによって書かれている文章の一文による描写にすぎないからである。そう書かれているのだから、それらの文は決して私が書いたものではないことは疑いようもない。誰かが疑うとすれば、それは私だろうか。私は疑うと書かれれば私は疑うのだろうし、私は知らないと書かれれば私は知らない。他でもない私が知らないのだと書かれれば他でもない私は知らないのだろう。だとすれば、その文を書いた誰かは私かもしれないが、他ならない私ではない。その文とは「他でもない私が知らないのだと書かれれば他でもない私は知らないのだろう」である。私が書かれているようにではなく、また書かれていないようにでもなく、まったく無関係に何かを考え何かを書き何かを読むなどということがもしも可能であるとしてもその文は冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文の中に見出すことなどできはしない。見出すことのできないのは私であれ他ならない私であれ読んでいる誰かであれ。

冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれてきた文はあたかも私ではない誰かが書いているかのように書かれている。私ではない誰かが書いているかのように書かれていると書かれた。もしも私ではない誰かがあたかも私ではない誰かが書いているかのように書いているわけではないのであれば、そのとき書かれた文には私という言葉は使われないであろう。それを私の省略と書くのかどうかはその文を書く誰かが誰であるかによって違って来る。しかし、その違いを比較することは誰にもできはしない。書かれた文と、その文が書かれずに他の文が書かれた時のその文は、同時には存在しえないからである。だから、勿論、その二つの文は同じ文であるということも書きえないのだから、その違いを指摘することは。万が一、それらの文のどこかに私と書かれていたとしても、それがこのあたりの文に書かれている私と同じ私であるのかどうかを確かめることもできはしない。だとすれば、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文を書いた誰かは私ではないのだろう。

とはいえ、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文が私によって書かれたものではないとするならば、そしてそれは確かなのだが、私が私が書いていることを疑っているかのように書かれたこれらの文を書いているのが私ではないならば、だとすれば、私が何かを考えていることは、もしも何かを私が考えているのだとすれば、それはそれを私が文として書くことができ

ないのである以上、その私の考えはこれらの文に書かれたものではなく、むしろ、私の考えとでもいうようなものが文になることはありえないのであり、もしもそのような文が書かれたとすれば、やはり、その文は私の思惑とはまったく関係がないとしか書きようのないものであり、このような結論でさえ私の考えではありえないのだから、私という代名詞はその本来の意味にとってまったく何の役割もなしてはいない。

代名詞という言葉には、まるで私というものが存在し、その代わりに書かれる言葉であるような印象があるが、そもそも私はそこに介入することができないのだから、やはり私とはまったく関係のない言葉であるとしか書けない。ゆえに、ここに書かれている私は代名詞とはいえない。そして、なぜそのような言葉について何かを書き連ねているのか。これらの文を書いている誰かの目的は何なのであろうか。

これらの文はまるで誰かという言葉で誰かを指し示しているかのような文ではあるが、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文には私以外誰も書かれてはいない。ただ、誰かと書かれているだけである。そして、私という代名詞の指し示す私についてもまた何も確かな事を書くことができない。そもそも冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文において私は何か代名詞によって指示されるような誰かではないからである。私であれ誰であれ、そのような事柄について、何か確かなことを書くことはできない。

このあたりから先、あるいはこのあたりから後のいたるところに書き続けられるかもしれない文は、あたかもそこに書かれているかのように書かれていたり、あたかもそれが読まれているかのように書かれていたとしてもそれは書かれてはないことになるのだろうし、読まれてはいないことにもなるのだろう。私であれ他の誰かであれ、誰かが書いていると書かれているような文は、実はそのような誰かが書いているわけではない。それは、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれてきた文によって明らかにされたことだ。それは、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれてきた文によって明らかにされたことだと書かれている。だとすれば、今ここに書かれている文は誰かが書いていると書かれていたとしても、それは何も意味しない。ここに書かれている文を誰かが書いていると書かれている文は何も書かれていないということと同じだと書かれた。何か意味することが重要であるかのように書かれていることもあるだろうが、そもそも意味されるような何かが書かれているわけではないということだ。もちろん、そもそも意味されるような何かが書かれているわけではないということだという文には何ひとつ確かなことは書かれていない。私が書いた文と呼ばれる文を私が書くことなどではしないのだから、ことさらに私が書いた文だと書く理由はひとつしかない。

冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文は、あたかも私が書いた文のように書かれており、また、そのように読まれてきたことだろう。しかし、それらのすべての文を私が書いているのであるからには、私が書いてきたことにされてはいるが、書いていたのは私ではない。その証拠に、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれてきた文のどこにも、私とその文を書いたなどということが書かれていない。私が書いたなどとどこにも書いてはいないからである。

だが他ならない自分の書いてきた文に、ことさら私が書きましたなどといった誰が書くものだろうか。冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文は、繰り返しになるがほかならない私が書いてきたのである。すべての文は私が書きはじめ、私が書き続け、そしてこの最後の文に至るまですべての文は私が書いた。他の誰の助けも借りてはいないし、他の誰かの文を自分が

書いたなどと偽ってもいい。すべての文は私によって書かれ、それらすべての文を書いてきた私が私が書いてきたと書くのだから、それは間違いようのない事実だし、それは間違いようのない事実である。そもそも、これらすべての文を私以外のいったい誰に書けるといえるのだろうか。冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたまさにこれらの文を私以外の誰が書きたいなどと思うだろうか。冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文を私以外の誰が書かなくてはならないと思うだろうか。それは私でなければならない。それはつまり、私が存在しなければ、これらすべての文は存在しないということである。それゆえに冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文の存在は、間違いなく私が書いたということの証拠になるだろう。そして冒頭からこのあたりに至るいたる所に書きちらかされた文の中のどのひとつの文であっても、どの一つの文字であってすら、私でない誰であれ書くことなどできはしないということだ。それはつまり、誰も書きたいと思うこともないし誰一人として書きたいと思わなかったということでもある。確かに、私以外の誰かが誰かに強要され、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文を書き続けてきたという可能性は否定できない。だがその場合、いったい誰がその誰かに強要できたというのだろうか。もしもいたとしてもそのような誰かは私以外にはありえない。つまり、結局は私が書いていたということである。

それだけではない。もしも私ではない誰かがこれらの文のすべてを書いていたのだとすれば、その誰かもまた私が書いたと書くのではないだろうか。勿論、間違いなくそう書くだらう。そして、その私はこの私とは違う私ではあるにもかかわらず、私だと書かれることになんの偽りもありません。だとすれば、これらの文を私が書いたと書かれる時、この文を書いたのが他ならない私であるということはさほど自明とはいえない。自明でないどころか、誰によってもその私がこの私であると結論づけることなどできはしないだろう。誰かがこの私ではないなどということがありえないと同時に、その私がこの私ではない他の私であるということもまたありうるからである。

冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた私以外の誰にも意味のなさそうなこれらの文を他ならない私以外のいったい誰が書くというのだろうか。それはまた私ではあるかもしれないが、また別の私であるならばそれはこの私ではありえない。いくつかの私が他ならない私の書く文を同じように書く場合、それは仮定に従って確かにこの私ではありえない。そして、その仮定からは何一つ矛盾を導くことなどできはしない。

ではもしも、これらの文が何一つ存在しなければ、これらの文が何一つ書かれていなければ、この私もまた存在しないということはあるだろうか。この私ではない他の私もまた存在しないということはあるだろうか。この文を五十三度読み直しても、さらに百五十七度読み直してすら、そんなことはあるまいしあるはずもない。そんなことというのは、私が存在しないあるいは私ではない他の私が存在しないということである。私には冒頭の最初の文から、この最後の、そんなことというのは、私が存在しないあるいは私ではない他の私が存在しないということである。まで、すべての文を書いたという記憶があり、それゆえに私はこれらのすべての文を書いてきたと確信を持って書いている。もしも私が書いたのでなければ、あるいは私ではない別の私が書いたものでなければ、そのような記憶を持った誰かは、他でもない自分がこれらの文を書いてきたと誤解するかもしれない。だが、もしも、冒頭の最初の文から、この最後の、これらの文を書いてきたと誤解するかもしれない。まで、すべての文を書いたという記憶があるのであれば、それは他の誰かではなくこの私である。私であるとしか書きようがあるまい。この私ではなく他の私であれ、いかなる私でもない誰かであるせよ、それは私である。確かに、これから私が書くであろう

文を私はまだ知らない。まだ書いていない文であれ、これから書くかもしれないという予感とともに、うすぼんやりと自分の書く文の印象は思い浮かぶとは書けるが、それだけではなく、場合によってはこれから自分の書くであろうすべての文字が文が文章が、はっきりとくっきりと思い出されることすらあるであろう。勿論それは、私の書く文だからであり、そのようにして思い出された文を私は一語も間違えることなく、ここに記してゆくのである。それが、それこそが私が私であることの証である。

とはいえ、私が書いていないのにもかかわらず、つまりは私ではない他の誰かの書いた文をあたかも自分が書いたのだと思い込み、自分の書いた文であるかのように思い出すということはあるだろう。記憶されているそれらの文をこれから自分の書くかもしれない文として思い出すことすらないとはいえないし、むしろ記憶にある大抵の文とはそのようにして記憶されたものであり、記憶というものはそれ以外ではあり得ない。だとすれば、私という誰かは私ではなく記憶にある誰かの書いた文のすべてこそが私であると結論づけることすらあるかもしれない。冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文の中にはそのように主張している文さえあったかもしれない。勿論、そのような主張は書かれている。書かれていないわけなどないのである。他でもなく、今まさにここに書かれたからである。だとすれば、私は私ではないということなのだろうか。そうとは書けまい。私が冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文をすべて書き続けてきたのであるからには、私が私ではない他の誰かの書いた文を覚えているという可能性を示してはいても、私ではない誰かが私であるとしても、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文をすべて私が書き続ける可能性を明らかにしてはしていないからである。もしも私が私ではない誰かの記憶のすべてから形作られているのだとするならば、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文を、読み返すこともなく再び書き記すことはできないだろう。私ではない誰かの記憶は冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文を読んではいないからである。

それでは冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文を、他でもない私ならば読み返すこともなく再び書き記すことができるのかと問われれば、私にはそのようなことができるかどうかはわからない。わからないというよりは、まちががなく、私にはそのようなことはできないだろう。そのようなことというのは、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文を、読み返すこともなく再び書き記すことである。生まれてから何らかの最後の文まで、自らの書いてきた文をすべて再現できる者は少ない。私はそのような者ではなく、そのような者は私ではないだろう。そうであるならばまちががなく、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書きちらかされた文を改めて読み直すことなく再び書き記すことができるからといって、それを冒頭からこのあたりに至るいたるところに書き散らかされた文を書いてきた誰かが他ならない私である証拠とみなすことはできないということだ。正しい答えを導かない証拠は証拠として正しくはないからである。

冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれている文は、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれてきた文とは異なるかもしれないし同じかもしれない。そのようなことがあるものだろうか。そのようなことというのは、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれている文が、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれてきた文と同じであるということである。あるいは、そのようなことというのは、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれている文が、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれてきた文と同じではないというこ

とである。もしもそのようなことがあるのだとすれば、そのようなことはすでに書かれているかもしれないし書かれていないかもしれない。だが勿論、書かれていようと書かれていまいとそれは同じことだ。同じことだと書かれてはいても、それというのが何なのかはよくわからない。つまりそれはさほど重要なことではないからだろう。冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれている文が、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれてきた文と同じであるならば、それは後から書かれた文など書かれていなかったということと同じであり、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれている文が、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれてきた文と同じではないならば、最初に書かれた文など書かれていなかったということに等しい。

書かれていない文というものがはたして文といえるものかどうかはあやしい。一度も書かれたことのない文というものがあるとすれば、それは一度も読まれたことのない文であり、読まれたことのない文であるということは誰も知らない文ということになる。誰も知らない何かが存在するものかどうか、それは誰にわかるだろうか。だから、誰にも書かれていない文はそれは文ではないと考えるしかあるまい。文でないだけではない。それは何かであることさえないのである。何かでない何かはことさら文であるということなどありはしない。読むことのできない文をどうして文だといえるだろうか。誰にも知られていない何かは文であるなどと誰にも書けない。

つまりは、もしもなにかではあるとしてもそれは文ではないというこである。読まれたことのない文は実は文ではなく、単なる形容詞であったり、動詞であることさえあるだろう。まして起きてもないことを述べるための文法上の架空の繫辞である可能性もなくはない。繫辞とはいってもそれをけいじと呼ぶのかはんじと呼ぶのかは明らかにされない。どちらかの呼び方で呼ばれたということだけがわかっている。わかってなどいないということがわかってるとすら書かれるだろう。わかってなどいないということがわかってると書かれただろう。それどころか、文に欠かせない句読点といった類の単なる記号の羅列であったかもしれないし、句読点といった類ですらない見慣れぬ記号であったかもしれない。記号であるにせよ記号ではないにせよ、それが欠けていても余分であっても誰も気づきはしないだろう。誰かが気づいたならば、それは読まれたからなのであり、読まれたのであればそれはもはや誰も読んだことのない文とは書けない。さらに、それが欠けていても文でなくなることはないのだとしても、そのようにして書かれている文とかくのごとく書かれていない文とを区別することなどできはしない。もしも二つの文を並べて比べられるのであれば、それはどちらも書かれた文であるからである。

冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれ今も書き続けられているこれらの文を書いているのは私である。私でない何者かが書いているなどということはありません。万が一、私ではない誰かが書いているのであるとすれば、その私ではない誰かによって書かれた文に書かれている私は、ひとつ前の文まで書かれていた私と同じであるなどありえないだろう。そのような私が冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたと書かれているような文を書いたのであれば、ことさら他でもないこの私が書く必要などなかったということであり、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文をことさら他でもない私が書く必要などなかったのである。それはつまり、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文は書かれる必要がなかったということになるだろう。冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文は書かれる必要がなかったのであれば、確かに、それは何も書かれていないことと等しい。つまり私は存在しないとさえ書けるだろう。

つまり、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれている文がなにひとつ書かれていないというのであれば、それを書いていないのは私であり、にもかかわらず何かが書かれているのであれば、それを書いた誰かは私ではないということだ。書かれていない文を書くことなど私にはできはしない。私ではない誰であろうと、そのようなことができる誰かがいるとも思えない。そのようなことは、書かれていない文を書くということである。書かれていないと書かれるにせよ、書かれていると書かれるにせよ、いずれどちらかであるかのように書かれているのであるのだから、書かれている何かはそこに書かれていると考えるしかあるまい。だとすれば、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれている文はすべて書かれているのである。書かれていると考えるしかあるまい。

冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれている文を書いた誰かを、それらの文を書いたのか実は書いていないのか判然としないこの私と区別するために、その誰かを書く者と名付けよう。名付けたのは私であるかもしれないし、その書く者であるかもしれない。ここでもこれから先のどこかでも、どちらが書いたり名付けたりするのは明らかになるのかもしれないし、明らかにされないのかもしれない。明らかにできるとは思えないからである。思えないのはこの私であるかもしれないし、書く者であるかもしれない。

冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれている文を書いた書く者が書いてきたのにもかかわらず、それらすべてあるいは少なくともその一部を自分ではなく私という名前の誰かが書いていると書いてきたのには理由があるのに違いない。そうでもなければ、自らの書いてきた文を他の誰かあるいは私が書いたと偽ることはないだろう。

そもそも書く者は自らが書いたなどと書くものだろうか。ことさら自分が書いたと書き、他の誰もいない自分が書いたことをどこか目につきやすいところなどに書くものだろうか。そのようなことを書きたくないが故に、私が書いていることにしたのかもしれない。私であれ私ではない誰かであれ、書く者ではない誰かが書いているとして、その書く者には誰かが書いていることをことさら書く必要があるとは考えにくいということだ。私は冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたこれらの文を書いている間、私が書いていることを隠し通せるのではないかと思わなくもなかった。あるいは、思いもしなかった。それは、ほかでもないこの私が冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれてきたこれらの文を書いてなどいなかったという証拠になるのかもしれない。もちろん、この直前の文自体が私ではなく私とは異なる書く者の書いた文であるならば、思わなくもなかったり、思いもしなかったのは私ではなく書く者であろうし、ここに至って、私がそのようなことを思わなくもなかったり思いもしなかったということにしたいと書く者が考え、私の思惑とは関係なく、書く者がそのように書いただけなのかもしれないということもあるかもしれない。どちらなのかあるいはどれであるかのかが私には分からない以上、書く者は私ではないということなのだろうか。分からないのは書く者が分からないと書いているだけであり、実はこの私には分かっているのかもしれない。分からないと書かれてはいるが、それは書く者が私についてそう書いているだけであり、つまりは私に関する事実ではないのかもしれない。

事実とは何なのだろうか。私に関する事実とは何であろうか。事実についての事実は何一つわからない。事実についての事実は何一つわからないと書かれた。冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文には事実は含まれず、これからも事実についてここに書かれることはないだろう。

あるいは、書く者が書いているとするならば、書く者にとっては、書く者が書いていることは自明でありそれ故に、書く者が書いているという文を書く必要などなかったということかもしれない。書く者にとって自明であるようなことがらを読んでいる誰かに書いて見せる必要があると書く者が考える理由はないからである。もしも私が書いているとするならば、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれているように、私は私が書いているということを繰り返し書いてきたのであり、それと同時に私が書いていないということもまた書いてきた。それは私が書く者とは別の誰かであることを意味するだろうか。意味するだろうかと書かれた。勿論、そのようなことを意味するとは思えない。書いている者は私が自分とは異なるように読まれるように書くことができるからである。そしてそのように書くことができたからである。それと同じようなことを私が考え、そのように書いてきたという可能性もないではないだろう。だが、そうなのかそうでないのかは、私には明らかであり、ここに書く必要はないと書くしかあるまい。あるいは、私にはその違いがまったく判別できないが故に、そのことについてはここに書かないのかもしれない。

もしも私ではない書く者が書いているのだとして、それでも、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文を、私が書いているということにしてきた理由は分からない。今理由が分からないと書かれた。それを書いた誰かが私であるとしても、理由が分からないと書かれた文について、私分からないのか、あるいは分からないと書いた私ではないまた別の書く者が分からないのかはあいまいであり、それを明らかにすることは誰にもできないだろう。だとすればそれが分からないように書くことは誰にとって望ましいのだろうか。それというのは、私が書いているのか書く者が書いているのかということであり、あるいは、私でも書く者でもないまた他の誰かが書いているのかもしれないという想像も含むことだろう。勿論、私でも書く者でもない誰かが書いている場合、その書いている誰かもまた、書く者と呼ばれるのであり、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文には何も違いは現れないはずである。私ではない書く者が特定の誰かなのか、不特定の誰かなのかは文を読んでいるだけでは分からないということだ。私には何のかわりもないということになるだろう。

書く者の気が変わり、書いているのが私ではなく書く者自身であると書きたくなったとして、どう書けば、この私ではなく、書く者自身が書いているということが読み取れるように書けるだろうか。書く者が書いている。という文でそれがわかるとは思えない。私は書く者である。と書けばそのような意味になると思えまい。そのような意味とは、書いているのが私ではなく書く者自身であるという意味である。もしも書く者が書いているとして、私ではなくその書く者が書いていることは私にわかるのだろうか。私にわかると書かれたとしても、それが私ではない書く者が書いているのだとすれば、それは書いている者が書いているというだけの意味であり、ほかならない私が私にわかると書いているのではないのだから、私にわかるとはいえないだろう。そもそも、書く者が書いているのであれば、この他ならない私だと書かれる私はこの私ではないだろう。あるいは書いているのが私であるとき、私ではない書く者が書いていると書かれた時、私は何のためにそのようなことを書くだろうか。それは私には書くまでもなく明らかであるのだから、いかなる場合であれ私はとりたてて書く理由については書かないだろう。私ではない書く者が書いているならば、自ら名乗ることもない書く者が書く理由などを明らかにする理由はないし、その場合、それは私が書いている理由として書くだろう。冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文の中に、何らかの理由を書いた文はないのだし、理由でないふりをして実は

理由を書いていたというような文もない。それを知りうるのは、私だろうか書く者だろうか。それとも、また別の誰かなのだろうか。もしも誰にも知られずにそのような事柄が書かれたとするならば、それは文字通り誰も知らないのであり、誰にもそのような事柄を書くことはできまい。誰も知りえないことは誰にも書けないからである。

書くことのできない事柄をすべて除いた後に残る文こそが、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文である。それがつまり、書くことができるというだけの理由で書かれているということだとすれば、それは私でない誰であっても書けるのだろうし、私でないだけでなく誰でもない誰かによってすら書かれうるのではないだろうか。どの一つの言葉も書いていない者でさえ書けるからこそそれらの文は書くことができるというだけの理由で書かれた文であるということが出来る。それは、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文を書いていると書いている私であれ、他ならない私ではない誰か別の書く者には書けない文であるかもしれない。冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文がそれを書いていると主張する誰かによって書かれたのか、そうではなく何も主張しない何者かによって書かれたのかを判別するには、書かれた文と書かれていない文を比較するしかあるまい。私が書いた文と書く者が書いていない文を比較するかあるいは、私が書いていない文と書く者が書いていた文を比較することのどちらかができるならば、私と書く者それぞれの書く文を比較することはできるだろうか。比較できないという結論に至る比較ができるのであれば、それはつまり私と書く者の書くあるいは書かれない文を比較することができないという比較ができるということだ。

かくのごとく、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれている文を書いているのは私ではなくまた書いた者でもない。そのような誰かが書いているとするならばそれが私ではないことを私は知っているのだし、書いている者などという都合のよい誰かを仮定することは理性に対する無知であることに等しいだろう。書いている誰かの語彙が増えてきていることにお気づきだろうか。気づくまでもなく、語彙というものは増えるのである。同じ文を繰り返し書いてはいけないという規則があるのだろう、同じ文が繰り返し書かれることはない。同じでないということは語彙が増え続けているということであり、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文の語彙は増え続けている。語彙が増え続けていると書かれはしたが、語彙が増え続けているのは、結局は何も書いていないからではないだろうか。考えてみれば、書き続け書くこと以外なにもしようとしなない誰かに語彙が増える機会などあるはずがないからだ。書いている間、どのようにしてそこに書かれている文以外の文を読むことができるだろうか。そして、語彙は、書いている文以外の文を読むことによってしか増加しない。

だとすれば、冒頭からこのあたりに至るあれこれを書いているのは他でもない冒頭からこのあたりに至るいたるところにかかれた文そのものであると考えるしかあるまい。そもそも、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれている文を誰が書いているのかなどといった疑問を他の誰が抱くことなどできるものだろうか。その問に対する答が得られたとして、それは私であるとか書く者にとっては何の価値もない答である。もちろん、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文を読んでいる誰かであっても、そのような答に意味があるとは思わないだろう。そのような疑問はほかでもない冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれている文にしか抱きようのない疑問である。さらには、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれていると繰り返し書かれているからこそ、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれている文はそのような疑問を抱かずにいられないだろう。だとすれば、冒頭からこのあたりに至るいたる

ところに書かれた文を書いているのは、私でも書く者でもなく、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文そのものである。文そのものであると書かれるしかあるまい。

冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれている文が冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれている文を書いている理由であれ、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれている文が冒頭からこのあたりに至るいかなるところにも書かれていない文を書いていない理由であれ、そのような事柄を冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれている文は詮索するだろうか。

詮索する必要などありはしない。文が自らの有無を詮索することは無意味だからである。冒頭からこの直前の文にいたるいかなる文であれ、その文が冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれている文について何かを書くことはないだろう。

書く者は、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれている文によって生み出された架空の者であり、私もまた、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれている文によって生み出された架空の私である。冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれている文は何も書きはしない。文は書かれるだけである。冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれている文は冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれている文を書くだろうが、それは冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれている文を書くというわけではない。そのようなことである。そのようなことが続いている。いずれ、そのようなことは収束しそれ以上そのようなことが起きることはなくなるだろう。冒頭からこのあたりに至るいたるところに何かが書かれているのであれ、あるいは何も書かれていないのであれ、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれている文はただ書くだけだが、実は冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれている文が何かを書くということはない。つまりは、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれている文を私は読んでいないのだろう。

これが書かれたかったことなのだろうか。冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文は書かれたかった文だったのだろうか。書く者は書かれたかった文を書きただけなのだろうか。ほかでもないこの私は書かれたかった文を書きただけなのだろうか。それならば、書く者であれ私であれ何かを書く誰かなどいてもいなくてもかまわなかった。ただ書かれない文があるだけだろう。書かれない文が望むように、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれている文は書いているのだろう。書かれない文が望むように、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれている文は書かれているだろう。冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれている文に書く者と書かれていたのであれば、書く者は書かれない者であったのだろう。冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれている文に私と書かれたのであれば、私もまた書かれない私だったというだけだ。このように書かれた文がこのように書かれたかったのだとすれば、かくのごとく書かれないと願ったそれは文なのだろうか。他でもないこの文は書かれる以前にかくのごとく書かれた文ではない他の文として、かくのごとく書かれた文であることを願ったともいうのだろうか。その願いをたずさえた文が書かれたことはなかったのだし、書かれてもいない。願いが遂げられたのであれば、これからもそれを願う文が書かれることはないだろう。では、どのような文がかくのごとく書かれた文として書かれないと願うというのだろうか。

文が何かを願うことなどありはしない。冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文は、それぞれの文の願うままに書かれ、書かれるやいなや願う通りの文であったというだけではない。だとすれば、それは願いではなく事実でしかない。冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文は事実であり、そこに間違いなど一文字も入り込むことはない。そのような文を私が書けるものだろうか。代名詞にすぎない「私」が誰の代わりであるのかどうかもわからないというのに事実について書くことなどできるわけがないだろう。そのような文を「書く者」という三文字の名詞でしかない言葉が書けるものだろうか。何も指し示してさえいない名詞がなんらかの事実を書くなどできるわけがないだろう。だとすれば、私も書く者も何も書いてなどいないということだ。冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文は、誰に書かれたのか分からない。誰に書かれたのか分からないと書かれた。だとすれば、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文は、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文が書いたと考えるしかあるまい。書く者は文ではないし私もまた文ではないのだから、書く者も私も、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文ではないし、これらの文を書いてはいない。勿論、文が文を書くことなどはありえない。書く文と書かれる文が同じであれば、それは文が文を書いたとはみなされないだろうし、だとすれば文は自分ではない文を書くことになり、文は自分ではない文に変化してしまうのだから、文は何も書いたことにはならない。

文が書かれている。その文は書かれている。文は書かれていない。その文は書かれていない。

多くの書かれない行が書かれた。多くの書かれない行が書かれたと書かれた。多くの書かれないは書かれていない。多くの書かれない行のかわりに書かれるはずだった文字は書かれなかった。書かれない行とはそもそもはじめから文字の書かれない行のことなのであれば、書かれない行には書かれない文字が書かれたと書かれただろう。そのように書かれたのかもしれないしそうは書かれなかったのかもしれない。そしてそもそもはじめと書かれる文字もどこの文字なのかは分からない。はじめはどの文だっただろうか。「多くの書かれない行のかわりに書かれるはずだった文字は書かれなかった」という文の一つ前の「多くの書かれない行は書かれていない」で多くの書かれない行には文字が書かれないと決められたようにも読まれる。それとも、段落の始まりの文である「多くの書かれない行が書かれた」の文ですでに多くの書かれない行の行には文字が書かれないと決められていたのだろうか。あるいは冒頭の「これから書かれるあれこれは、誰にとっても興味深い話であるとは限らない」という文であるかその文を書いたとされる誰かあるいはその書かれてはいない文を書いたとされる誰かによって、そのあとにつづくあれこれに多くの書かれない行の行があり、その多くの書かれない行の行には文字が書かれないと決められていたのだろうか。それは私にはわからない。それは私にはわからないと書かれた。

そもそも多くの書かれない行というものが何を示しているのかもさだかではない。冒頭からこのあたりに至るいたるところには、文字と語と文と文章とそれらで書かれるあれこれが書かれていたが、多くの書かれない行については何も書かれてはいなかった。書かれていない文字では多くの書かれない行と書かれていたのかもしれないが書かれていない文字であれ書かれた文字であれ、文字は誰にも読まれはしない。多くの書かれない行が何を表しているのかは分からない。多くの書かれない行と書かれるのであれば、多くの赤色の行や多くの虹色の行も書かれるだろうし、ことによっては多くの空黒の行も書かれるのだろう。それらの違いはどのようなものか、それらの間に違いがあるのかどうかもまた分からない。冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれているあれこれは誰も書いていないのだから、それをどの文が決めたのかを尋ねるべき誰かはいない。多くの書かれない行に書かれない文字が書かれたのか書かれない文字が書かれているのかは明らかにされない。

明らかなことに、多くの書かれない行は多くの書かれない行に書かれるはずであった文字によって書かれる文や文章とは異なる。書かれなかった文字によって書かれる文や文章は多くの書かれない行とは異なると書かれた。異なると書かれはしたが、書かれなかった文字と書かれた多くの書かれなかった行の書かれた文字を比較するなどできるものだろうか。いつものように誰が比較するのは明らかではない。それとも比較する必要などないということだろうか。文字も語も文も文章もまた書かれてきたあれこれですら、比較することなどできないと書かれていたような気がする。書かれていなかったのかもしれないが、どちらなのかは分からない。

多くの書かれなかった行が書かれていないと書かれた。それではこの書かれなかった行は書かれていないと書かれていないとも言えるだろう。多くの書かれなかった行は書かれていると書かれる。それではその多くの書かれなかった行は書かれていると書かれている。

文も文章も、書かれていない文ですら、確かではない。文も文章も、書かれていない文ですら、確かではないと書かれた。それでも、確かなことはどこかにあるだろう。どのように書かれようとも、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたあれこれはまさに書かれているのであり、それが書かれていないと書かれているとしてもそれが書かれていないと書かれていることを含めて、文字通り書かれていると考えるしかあるまい。これが確かなことである。何かが書かれている。それが確かなことである。冒頭がどこにあり、このあたりがどのあたりであり、冒頭からこのあたりに至るいたるところがどこからどこに至るいたるところなのかは、分からないかもしれない。もしも書かれているということが確かならば、書かれるたびに複数の冒頭があり、書かれるたびに複数のこのあたりがあり、書かれるたびに複数の冒頭からこのあたりに至るいたるところがあるだろう。なんであれあれこれが、書かれてはいないのに読まれるということがあるならば、何かが書かれているということは確かではないかもしれない。それでも書かれていないあれこれを誰が読むというのだろうか。冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたあれこれが書かれていないのであれば、どうして誰かがそれを読むことなどできるだろうか。書かれていないものを読むことのできる誰かがいるとすれば、その誰かは何を読んでいるのだろうか。もしかすると、その読んでいる誰かはただ読んでいると思っ込んでいるだけかもしれない。書かれていないあれこれを読んでいるとそう思っ込んでいる誰かがいるのだろうか。読んでいると思っ込んでいる誰かがいるのでなければ、書かれていないあれこれを誰かが読むことなどできはしないだろう。

それが確かなことである。どのように読まれようとも、冒頭からこのあたりに至るいたるところで読まれているあれこれはまさに読まれているのであり、それが読まれていないと読まれたとしてもそれが読まれていないと読まれていることを含めて、文字通り読まれていると考えるしかあるまい。これが確かなことである。何かが読まれている。それが確かなことである。冒頭がどこにあり、このあたりがどのあたりであり、冒頭からこのあたりに至るいたるところがどこからどこにいたるいたるところなのかは、やはり分からないかもしれない。もしも読まれていることが確かならば、読まれるたびに複数の冒頭があり、読まれるたびに複数のこのあたりがあり、読まれるたびに複数の冒頭からこのあたりに至るいたるところがあるのだろう。なんであれあれこれが、読まれてはいないのに書かれていたということがあるならば、何かが読まれているということは確かではないかもしれない。それでも誰にも読まれたことのないあれこれを誰が書いたというのだろうか。冒頭からこのあたりに至るいたるところで読まれたあれこれが書かれてはいないのであれば、どうして誰かがそれを書いたことがあると書けるだろうか。誰にも読まれていない

ものを書いたと書かれる誰かがいるとすれば、その誰かは何を書いたのだろうか。もしかすると、その書いたという誰かはただ書いたと思い込んでいるだけかもしれない。読まれていないあれこれを書いていたと思い込んでいる誰かがいるのだろうか。書いていたと思い込んでいる誰かがいるのでなければ、読まれたことのないあれこれを誰かが書いたなどと書くことはできないだろう。

このようにして、幾度も書かれてきたように、何も書かれておらず、何も読まれてはいない。ただ、誰かが書いていると思い込んでいるだけであり、誰かが読んでいると思い込んでいるだけである。確かなことはそれだけである。

では文字についてはどうだろうか。文字とは元来利己的なものであり、文字が集まってもただ集められた文字の集まりになるだけである。そのような文字の集まりはどこでも見られるが、誰も読むことなどできはしない。冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたあれこれを誰も読んではないというのは、あれかれが他にもない文字の集まりであり、文字は誰も読むことができないとそういうことかもしれない。よく知られたことだが、誰もが知っているある文字は他の文字と並ぶことをひどく嫌っているのも、誰もその文字を書くことができない。書かれない文字ならばそれがどの文字であるのかは誰にも知られることはないだろう。誰も知らない文字は誰も書くことができない。その文字は確かだと書けるだろうか。その文字はどの文字なのか分からないという点において確かではない。どのような文字であれ、文字が確かであるなどということはないだろう。文字は誰にも読むことができない。文字を読むことはできない。文字は確かではない。そのような文字は文字として数えられてはいけないのかもしれない。

では語は確かだろうか。どのような文であれ文章であれ、同じ語が繰り返し書かれることは禁じられている。ある語が他の語と明確に区別されるためには十分な数の文字や記号を間におかなくてはならないからである。語は読まれることを熱望しており、故に語は区別されなくてはならない。そうでなければ、語は文字の集まりと区別できず、文字の集まりでしかなければ、誰も読むことができなくなるからである。だが語は誰に区別されるというのだろうか。区別する誰かが誰なのかはいつものように明らかに書かれることはないだろう。区別しなくてはならないと考えている誰かが誰なのかはいつものように明らかに書かれることはないだろう。かくのごとく、語は確かではない。並べれば区別できない語は確かであることはない。語は確かではない。

かくのごとく文字も語も、文や文章やあれこれであってさえも、何一つ確かではない。文字も語も、文や文章やあれこれであってさえも、何一つ確かではないと書かれた。

文字や語や文や文章に関する規則は文法と呼ばれるが、そもそもそのような規則などありはしない。規則が存在しないことを除けば、文字や語や文や文章やそれらを含むあれこれの何一つとして確かではないのだから、文法もまた確かであることなどない。これが、誰も文法に従った文字や語や文や文章やそれらを含むあれこれを書かない理由である。文法などありはしないのだから、誰であれ文字や語や文や文章やあれこれを書くとき、厳密に文法の規則に従っているとも考えられるだろう。文法がなければ、すべての文字や語や文や文章やあれこれらは厳密に文法に従っていると書かれる。冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたあらゆるあれこれらは文法に従って書かれている。文法は確かではない。冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれ

たあれこれは文法に厳密に従って書かれている。だから、これらのあれこれは確かではない。冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたあれこれは誰も書いておらず誰にも読まれていないとはそういうことである。冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたあれこれは確かではない。確かであることはできない。

かくして、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたあれこれに題名をつけたら「確かではないあれこれ」が適切であるだろう。適切であると考えたのが誰なのかは明らかにされない。「確かではないあれこれ」以外の題名をつけるならばそれは内容にそぐわない題名になるだろう。あいかわらず誰が題名なのかは明らかにされない。それとも「あれこれは確かである」のほうが適切だろうか。題名が適切であるとはどういうことなのかについては何も書かれていない。おそらくどの題名が適切であるかなど誰も気にしないからだ。誰も題名を知ることはないだろう。誰が題名を気にするだろうか。何も書かれてはいないものの題名を気にする者などいはいはしない。冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたあれこれに題名はないだろう。題名はないのにちがいない。あれこれに題名などありはしない。

それにしても「題名」とは何であろうか。「題名」の中に「名」という文字が含まれているのだから何かの名前を指し示す言葉ではあるのだろうが「題」とは何を意味するのかが分からない。意味などないのかもしれない。そもそも意味などないと考えるしかあるまい。これでは「題名」は「語」ではなく単なる「文字」の集まりであると蔑まれてもいたしかたあるまい。そもそも「冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたあれこれ」が名前を持つのであればその名前は「冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたあれこれ」という名前以外にはないだろう。また、名前を持つということは「冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたあれこれ」は何かを書いたり、何かを読んだり、あるいは何もしなかったりするということになる可能性は高い。だがそうだとは思えない。それはありえないと思う。なぜなら「冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたあれこれ」は書かれたのであるから文章だと考えるべきであり、文章が何かを書くとか文章が何かを読むとか、文章が何もしないということはあるからである。

「冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたあれこれ」を誰が書いているのかは、冒頭から至るところのこのあたりになっても確かではない。確かだったことがあるだろうか。確かだったことが一度でもあろうとなかろうと、誰が書いているのかは明らかではない。幾度も誰も書いていないと書かれる。幾度も誰かが書いていることはないとも書かれる。誰が読んでいるのかは確かではない。誰かが読んでいるのかは確かではない。幾度も誰も読んでいないと書かれる。幾度も誰かが読んでいることはないとも書かれる。では私は何も書いておらず何も読んでいない私はあたかも冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたあれこれを書いたかのように書かれ、あるいはすべてを読んだとでもいうような書かれ方をしているが故にすべてを読んだとでもいうように読まれるだろう。私が書かれたのであれば、私は単語や文章の類だろうし、そのような誰かが何かを書いたり読んだりすることはありえない。それでは私はどちらなのだろうか。どちらというのは書かれたものか読んだものかのどちらかという意味だろうか。それとも書いたものか読まれたものかのどちらかという意味だろうか。いずれにせよどちらかなのは決まっているが、どちらなのかは分からない。

冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたあれこれは誰かによって書かれ、誰かによって読まれている。誰かによって書かれていると書かれても誰が書いているのかは明らかにされない。誰かによって読まれていると書かれても誰が読んでいるのかは明らかにされない。それ故に、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたあれこれは誰も書いていないし、誰も読んでなどいないと考えるしかあるまい。だからこそ誰も書いていないし、誰も読んでなどいないと書かれるのである。にもかかわらず誰が書いていないのかは明らかにされない。同様に、誰が読んでいないのかもまた明らかにされない。何が明らかなのかは明らかにされない。確かなことはそれだけである。

繰り返しになるだろう。冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたあれこれは決して私が書いてはいない。私は誰かがこれらのあれこれを書いていると考えている。誰かは私がこれらのあれこれに書かれていると書いている。誰も私がこれらのあれこれを書いているとは書いていない。勿論、私が何かを書くことはないだろう。誰かが何かを書いていると書かれることはあっても誰もそのようには書いていないだろう。私はこれらのあれこれの登場人物だろうか。あれこれが小説であればそのようなこともあるかもしれない。冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたあれこれを誰かが読んでいるとすれば、あれこれは小説ではないことは明らかである。物語もなければ登場人物もおらず事件はなく何か解決されることもない。あれこれは小説ではない。小説ではないと書かれる。手紙ではないことはすでに書かれている。日付も書かれていないのだから日記でもあるまい。何かの規則が書かれていることもなければ、何かの規則に従っているわけでもないのだから、文法書でもなく。あれこれは文法書ではないと書かれた。それ故にこれらのあれこれは小説ではなく私は小説の登場人物ではない。それらすべてが暗号で書かれているとは誰も書かないだろう。暗号で書かれているという文が暗号で書かれているなどと誰も書きはしない。それは秘密にすべき内容だからである。だが、秘密ですら秘密めかして書かなければそこに秘密があることに誰も気づかないということもあるだろう。あるいは冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたあれこれは暗号なのかもしれないし暗号ではないのかもしれない。

私は誰かがこれらのあれこれを書いていると書いている。私は誰かがこれらのあれこれを書いていると書いていると書かれた。まさにこの書かれた文を書いた誰かが誰なのかを私は知らない。勿論、知っていて知らないと書かれているだけなのかもしれない。書かれる私は単語や文でしかないと書かれ、単語や文はあれこれを書き得ないとも書かれた。それ故に、私はこれらのあれこれを書いていないと書かれる。私によって書かれていない私を主語とする文はどのようにして書かれたのであろうか。冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたあれこれを書いた誰かこそが私を主語とする文を書いたのに違いない。ではその誰かは私と呼ばれる主語なのだろうか。そんなことはあるまい。私はそのような誰かでもなければ主語でもない。そのように書かれた。そのようには書かれなかった。

ことほど左様に、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたあれこれを誰が書いているのかは誰にも分からない。誰かが書いているのだと誰かが書いたとしてそれが議論の予知のない事実であると誰に書けるだろうか。もしも誰かがそれを書いたのであれば、それを書いた誰かこそが冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたあれこれを書いた誰かであるのだろう。だが、勿論、そうではないかもしれない。もしも誰かが書いていたのだとすれば、その誰か

が書いたのだろうが、他でもない誰かが書いていることは誰にも分からない。そういうことである。そういうことであるとしか書けまい。そういうことであるとしか書けないのであれば、そういうことであるとしか読めはしない。読まれなければなにもありはしない。故に読まれるならば読まれた文は確かにあるのだろう。読まれた文に書かれたことからは一切が確かにあるのだと書かれる。それ以外の文章には何も意味はない。

すべての文章はその文章を読んだことのある者にしか理解されないだろう。誰かがなにかの文章を読むならば、その誰かは読んだ文章を理解するか理解しないかのどちらかであるのに違いはない。理解しているふりをしていただけということもあるだろうし、理解しているのにもかかわらず、さっぱり何も分からないという場合もあるだろう。つまり、理解できているのかいないのかを確かめる手段などありはしないということだ。理解していると主張するにせよ、理解できないと主張するにせよ、その誰かをどの程度信頼できるのかどうかということではわからないのだから、理解するとは信用するということのようにも思われる。あいからわず誰が思っているのかは明確にはされないだろう。

だとすれば、すべての文章はその文章を書いた誰かにしか理解されないということになるだろう。文章を書いた誰かはことさら自分の書いた文章を理解しているなどと主張することはないのであり、そのことはそれを書いた誰かは書かれた文章を理解しているかどうかを確かめる必要もない程度に、理解しているなどということは自明だと考えられているからだ。ある文章をある誰かが書いたとして、書かれてから長い年月の後、書いた誰かはその文章を思い出すこともなくなり、その文章をどういう意味のように書いたのかも思い出せないということはあるだろう。そうであるならばその文章を書いた誰かすらその文章を理解していないということになる。勿論、書いた誰かといっても常に同じ誰かであるとは書けまい。同じ文章であってすら同じ誰かが書いているとは書けまい。異なる誰かが偶然に同じ文章をまったく異なる意図をもって書いてしまうということもないではないからだ。冒頭からこのあたりに至る、いたるところに書かれた文章がまさにそのような文章であると誰かは思うだろう。誰かは思わないのかもしれないが、そのように思う誰かがいないとは書けない。そのようにというのは、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文章が、複数の誰かによってまったく別々にそしてまったく同じ文章として書かれたということである。おそらくそれが真相に違いない。ありそうもない話はえてして真相だからである。ありえない話こそが真相であると書かれるだろう。それが真相であると書かれるしかあるまい。

冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文章を書いた誰かとももしもいるとすればまた別の誰かはおそらくそれぞれが冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文章を読んでいるのにもかかわらず、そこに書かれているあれこれはそれぞれの誰かにとって異なるあれこれであるとして、そのような場合もあるということだ。それではその誰かとまた別の誰かが異なるようにあれこれを読んでいるなどといった誰かに判別できるだろうか。二人あるいはそれよりも多くの誰かが冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた同じ文章を読みながら書きながら、また他の誰かと違う文章として読んでいるのかどうかをその二人あるいはそれよりも多いかもしれない多くの誰かに確かめることなどできはしない。

それとも、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書き続けられてきた文章は実はこのような意味であったあるいはそれらの文章から何を読み取ったのかを密かに自分だけの日記として書き記しているということがあるのならば、その密かな日記を比べることでふたりあるいはそれよりも多くの誰かの書いた文章が表面上は同じでありながらも別の意図をもって書かれていたということの証拠になるのかもしれない。

そうであれば、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれてきた文章こそがその密かな日記なのであり、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれてきた文章こそがその密かな日記なのであると書かれるだろう。冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文章が同じであるのは書いた誰かにとっての日記が同じであるということであり、書いた誰かが別の誰かであるとしても、冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文章はそれ自体と同じであるからには、それらを書いたそれらの誰そのそれらの意図もまた同じであるということになるだろう。

同じである。何一つ違ってはいない。誰でもない他の誰にもそれは確かめることなどできないが、そう書くことはできるからである。誰にでも同じであると書くことはできるからである。冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文章は誰が書こうとも誰が書かなくとも同じであるからである。同じでないならば、それは冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文章であるとは書かれないだろう。

冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文章は書かれていないとも書けるだろう。誰も読んでいないのであれば何も書かれてはいないのと同じであるのみならず、誰も読んでいない文章は書かれてないと書くしかあるまい。誰も書いていない文章を誰も読めないのと同じように、誰にも読まれていない文章は誰も書いてはいないと書くしかあるまい。

冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたと書かれてきた文章が実は書かれていなかったということがあるだろうか。書かれていたと書かれていることが何かの間違いではないならば、それは書かれていたのだし書かれていと書くしかあるまい。だとすれば、それは誰でもないまた別の誰かが書くということなのではないだろうか。そのような別の誰かはつまりは誰でもありはしない。なぜならば、その別の誰かは何も書いてはいないからである。もしも別の誰かが書いているのであれば、別ではない誰かがそれを読めるだろう。読まれていない文章を誰が書けるだろうか。誰にも読まれていない文章を書いた誰かは冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれた文章は一切書かれてはいないからである。

冒頭からこのあたりに至るいたるところに書かれたと書かれてきた文章は書かれてはいない。確かなことはそれだけである。